

---

# 色彩コード

水域 色

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

色彩コード

### 【著者名】

ZZアーティスト

### 【水域 色】

世の中に、当たり前のよつて「色」「音」が溢れ返っている。  
人間の感じられる2~5の情報がまさしくそれらだ。

音楽好きの古音雨姫は、絵描きで、常にヘッドフォンを付けている  
雛墨 梓と進学先の高校で出会い。

そして進学先にはやりたかった文化系部活がなく、激しく落胆する  
雨姫だったが…?

雨姫の幼馴染でとにかく元気な望月 愛と、新しい友人櫛枝 蓮時  
や水無月秋乃のちょっと不思議で切ない関係でつながった、音楽と  
美術の文化系青春ラブコメ！！

\* 1 - 1 色 橙の朝（前書き）

プロローグ

・ 零話

それは本当に綺麗な配色だった。

今まで感じたそれとはまったく別物で、まるであれは  
頭の中に音楽が流れこんだ。

優しくてあたたかなまどろむような音。  
これが彼女の音なのだろうか。

それはほんとに、ほんとうに綺麗な音だったんだよ。  
こんなことあるんだなって：

君から奏でられた音に沢山の色が重なっていく。  
優しくて落ち着く、どこか懐かしく感じる色。  
この色が君の色なのかな??

あの一室から生まれた「色」と「音」は。

世界を潤す唯一の「感情」を。  
気づかせてくれたんだと。

北陸道主計局

やうすいはんじゆであつこ。

## \* 1・1色 橙の朝

ああ…。

なんて心地がいいのだろう。

カーテンの隙間からこぼれる朝の優しい光に眩しさを覚えるも天国のような心地よさで、その何とも言えない気持ち良やかふわり身を任せて数時間。

誰もが其れに屈するであるひつ現代に在る最強の兵器ともいえるソレに、また今日も「Kの負け。」だって、この心地よさの誘惑って皆も、拒絶なんてできないよな？

「朝のふつわふわの布団つーのはなんでこいつ……」

三度目の眠りの世界への誘いに意識を放棄しかけたところで耳に軽快な音楽が流れこみ、鼓膜を心地よく揺らす。少し落ち着いた優しい雰囲気で、朝にぴったりの音楽だ。大体寝る前に音楽を聴きながら寝る習慣があるのでけれど、朝起きた時に気持ち良ぐ起きられるよつひとセツトするC君も前の晩に悩んだりする。

要するに田舎ましにセツトしてあつたオーディオコンポが朝がきたのだと主張するよつに鳴りだしたのだ。

「んあああ……はい。はいはいはいわかった、わかつたから静まれ、今起きるからああ……」

止まらない欠伸と襲いくる睡魔との激しい戦闘は相当の氣力と精神力を必要とし、あまりの強敵に何度も諦めかけるも、なんとか残量の少ない気合でそれらを払いのけベッドからずるずると這いずりでる。

喉が焼けるよつに痛い。乾ききつた喉を潤すために水を求める台所へと向かう。

とある一人一DKのアパートにあるその台所は、小さいながらも使いやすいように綺麗に整頓されている。それに錆びやネジの緩みは無くよく手入れしている。

「つづふはあああつ…美味しい！いやあ、今日こそ天に召されるかと思つたあ」

たかが水道水されど水道水。美味いつたら美味しい。砂漠の中の才アシスよろしく乾いた喉を潤し、ぱしゃぱしゃと顔を洗つて目を覚ました。

あ、申し遅れました俺の名前は古音雨姫ふるねつきと申します。今年から高校に入学しました…つて一体誰に話しかてるんだ俺は、時間が無いってのに。

なんやかんや眠い気持ちを押し殺してヤカンに水を入れ、ガスコンロに置いて火をかける。

朝に飲む珈琲がたまらなく好きなのだ。休みの日など時間があるときはパンを焼いたり、ちゃんと豆を挽いたものを使って珈琲メーカーで作るのだけれど。いかんせん平日は時間が無いので殆んどインスタントで済ます。なんてつたつて楽だもん。

淹れたての珈琲を口に含み、香りを楽しんで一息つく。この辺りになるとだいぶ目も覚めている。ふと携帯電話を開いて時計を見るともう時間もない。入学式からまだ数日しかたつてないし、遅刻するのもなんもなく気が引ける…。流石にいきなり不良のレッテルを貼られるなんてお断りだ。遅刻しただけで不良扱いされるのかは、まあわからないけれど。

朝は低血圧のせいなのかあまりよく起きれなくて苦手な為、前日に簡単な弁当を作つて置く習慣がある。今日の弁当も昨日の晩御飯の残りをさくつと詰めて、『ご飯もゆかりという梅のふりかけを混ぜただけのシンプルな弁当だ。

飲み物には、さつき淹れたインスタント珈琲をサーボマグに注ぎ込み、持つて行く。勿論気分によつてお茶にしたり紅茶にしてみたりするんだけれど。

そんな弁当とサーボマグをさくつと鞄につめ、寝起き早々慌たしくアパートをでたのだった。

錆び付いた匂いが仄かに香る鉄の階段を軽快に下りて外へ出ると、春独特の暖かで涼しくて、この季節独特的良い香りのする風が吹いていた。この風を浴びると朗らかで清々しい気持ちになる。ああ新生活、って感じ。

太陽の温かい日差しに照らされながら今日も iPodとヘッドフォンをいつものように装着し、軽い足取りで歩き出す。（オレンジ色の iPod nanoと、audio techniquesのヘッドフォンはとても気に入っているのだ）

朝の爽やかさと iPodから流れてくる音楽に思わず微笑んでしまつ。

「こんな気持ちいい朝とお気に入りの音楽と。明らかに青春ポイントあがってるな、これ！」

某電波ラノベではないが本当に気持ちいいのだ。春だから？新しい学校と仲間に希望が溢れているから？

よくわからないけれどこれって、高校生活もとりあえず出だし順調つてことでいいよな？

学校までの道程に、一～三件のコンビニがある。

実はこの、「高校の通学の途中にコンビニに寄つて何か買い物をしていく」っていうイベントに酷く憧れています。今までなんとなく目に入つてきていたんだけど、仲のいい友達同士でコンビニに入つて仲良くおにぎりや飲み物を選ぶ姿がなんか羨ましくて。ずっといいなあって思っていた。

でもなんせ事情があつて一人暮らししているもんだからお金があんまりない。っていうか一つ一つの商品がそこら辺のスーパーに比べて高い。

その辺を考慮すると俺としては断然スーパー派なんだけど……だけど、だけれども、いつか朝にコンビニに寄つてから学校に行きた

い。

まあどうしたって一人暮らししながら食材でもなんでも安さが重要なのだ。安い物の為なら主婦のおばちゃんの戦場、タイムバーゲンにだってこの身一つで飛び込んでいく。

でも…ものすごく憧れる。憧れるもんは憧れるんだな、うん。

通学路でもある大通りを歩いていると俺の住んでいるアパートから数えて二つ目のコンビニの前を通りた時、ふと田に入った。

「ううううん…………」

女の子が、奥の硝子の扉に陳列されたペットボトルの飲み物コーナーと、パックの飲み物コーナーを行ったり来たりしながら、なにかものすごい形相で両手に飲み物を持って悩んでいた。よく見てみると今年から通い始めた俺の高校の制服と同じだし、せりによく見てみると確かあの子は同じクラスの子みたいだった。

まあ…まだ話した事はないんだけどね。まだ、なんとなく恥ずかしさやら思春期独特のあれでなかなか新規の友人を作れずにいた。でもなんか見かけちゃつたら気になっちゃつたし、折角だから憧れのコンビニに一瞬入ろうかなって迷ったんだけれど、弁当も飲み物も既に準備してあるからなあ。

少し残念に思うけれどここは我慢しようと愚う。近々近所のスーパーの特売だし。

でも、今日は学校に着いたらコンビニで見かけたよくヘッドフォンをしているあの彼女に思い切って話かけてみようかな。

あれからコンビニを通り過ぎてふと気づいたんだけど教室で座っている席も、彼女の後ろの席だった事を思い出した。だから前から話してみたいなって思っていたんだった。

思い出すとなんとなく気になつたのでちょっと小走りでコンビニまで戻つてみる。「ありがとうございましたー」と元気に良い店員の声が聞こえてくる。さつき見かけた同じクラスの女の子以外にも

学生が何人か入っていて、友達同士仲良さげにコンビニの袋を持って歩いてくる。「う、やっぱ羨ましいな。だけどさっきのコンビニの女の子とはまだ鉢合はせていない。もしかしてまだコンビニにいたりしてな。流石にそれはないか。

そーっとコンビニの窓から覗いてみると、よくよく考えると傍から見たら結構怪しい行動だったかも知れない。警察に通報されなくてよかったです。

コンビニの中にはまださつきの女の子が飲み物を手に持つて悩んでいた。まさか本当にまだ悩んでいるとは思ってなかつたので、びっくりして少しづつこけつとも笑ってしまった。

今は飲み物選びに夢中みたいだし、そつとしておひつ。学校で話せたら好きな音楽の事とか、結局何の飲み物を選んだのかとか思い切つて聞いてみよう。

「あれ、でもこいつ風に初めて声をかける時って、どうやって話しかけるんだっけ?」

そんな新鮮でキラキラした春一番の風のように淡く甘い気持ちでコンビニを後にし、 iPodから流れる優しくも力強い音楽と一緒に学校へ向かった、綺麗に橙色に染まつた朝だつた。

\* 1・1色 橙の朝（後書き）

主人公としてこの物語を進行している彼の名前は古音雨姫といいます。

春の初々しさと新しい生活に心を躍らせる気持ちをうまく表現した  
かつたのですが、どうでしょうか。

ところで朝コンビニに入るとか憧れません？昼<sup>ひ</sup>はんがコンビニ  
の「飯の友人は大体「一口頂戴」の餌食になつてました。懐かしい。

アパートから歩いて三十分位である「学校までの道程を音楽と共にゆっくりと歩き、学校に近づくにつれてまだ綺麗に咲いている桜の風景が緩やかに、ふわふわと見えてくる。ひらひら、と少し散つているのもまた心を揺さぶる綺麗な光景だ。

俺が今年から通っているこの学校、姫神高校は校舎の後ろに、緑が豊かで流れている山の水も澄んでいる姫神山が聳え立つていて、その麓つてほどでもないが姫神山の近くに姫神学校は建つていて。そしてその姫神山には小さな公園や展望スペースがある。俺も昔小さい頃よく遊びに行つたものだつた。公園には降りきるまで結構長い滑り台があつて、昔はそのあまりの長さと高さに足がすくんでしまつっていたけれど、この前ふらつと姫神公園に行つた時にはもう、昔のように長く感じなくなつてしまつていた。ちょっとぴり時の流れに切なくなつた。

夏には姫神公園でBBQや花火などしながらワイワイとキャンプをしている人達も沢山いるし、そこからは星がかなりよく見えるから天体観測をしにくる人もいる。満天の星空つて、見上げると壮大で空に広がる黒の先には果てがなくて。数多に光り輝く星を見てるとなんて自分は小さいんだろう、とか。悩みとかも搔き消されて無心になれる。星を見上げることや星座、宇宙の事を考えたりする事は大好きだ。

そしてこれも夏に多いんだけど、特設ステージで音楽のイベントもやっていたりする。中でも姫神ロックフェスといつ名のイベントには俺もよく見に行くんだけど、規模が小さいながらも毎年ものすごく盛り上がる。ROCK、ラウド、メロコア、ミクスチャー、エモ、メタル。なんでも有りのイベントだ。モッシュやダイブがおこり熱氣が物凄い。そこにいる全員が音、空間を共有して夢中で音

樂に身を任せ、リズムに身體を乗らせる。いつかこのステージに上がつてみたい。演る側のステージからみたお客様のうねり、顔、声を全身で浴びてみたい。そう、よく憧れたものだったな。

あ、そうそう。姫神山にある幾つかの神社はとても大好きな場所。長澤神社と呼ばれる山の中にある神社は山の中にあるので当然周りには様々な植物と小さな沢、沢山の樹に囲まれている。

本堂に行くまでの道中は、古びた石造りの階段を登るのだけれど、その階段に鳥居が何箇所にも建っていてちょっと独特の雰囲気がする神社だ。

そんな長澤神社にはたまに行つては癒されにいく。大切な場所の一つだ。姫神山の神社に限らずとも、あの神社独特的の雰囲気がたまらなく好きなのだ。静かで、厳かで、優しくて。全て諭されているような。

あと因みに、山の麓にもう一つ小さな社がある。此処は余り知られていないけれど、とても綺麗な水面がある小さな社。ここにも小さな頃によく来ていた場所で、お気に入りの所だ。

そして姫神高校を紹介するとしたらやはり、これに忍きる。

姫神高校は春になると桜が綺麗に咲く学校として有名であり、その量も相当のものなのだ。長樹の桜も数本所有している。校門を抜けると一望できる桜の景色は圧巻だ。目の前いっぱいに咲き乱れる桃色、ひらりひらり静かに散つていく花弁。その光景はまさに幻想的過ぎてちょっとした異世界なんじゃないかと錯覚してしまふぐらいに、だ。

わかりやすく説明すると、それは休日になると一般の人達も見にくる程の絶景なのだ。当然小さな頃からちょくちょく見に来ていた。はるばる県外からもくる人もいるらしい。

「うーん、淡い桃色に染まった世界だな。何回眺めてもやっぱり綺麗だわ」

この桜が目の前いっぱいに咲き乱れる幻想的な風景が入学の決め

手になつたのは秘密だ。

そしてこの風景には、大切な想いも思い出も特別な感情も沢山詰まっている。

淡い桃色をじっと見ていると心の奥がじわっと何だかわからなくなるで満たされていく。

氣を抜くとヘッドフォンから流れる音楽と風景に涙腺をノックされて、思わず泣いてしまいそうになる。理由など、なにもない。

~~~~~

「おはよー、雨姫！」「こんな所でな」「立てんのー？」

ーのああーー！」

突然の衝撃に勢い余つて数歩前のめり、装着していたヘッドフォンがすとんと首元に落ち、案外すっぽり収まつた。ぶつかつた背中にじわじわと鈍痛がはしる。一瞬なにが起こつたのかわからなくなり、ちょっとしたパニックになる。しかしそく考へるとこの痛みには身に覚えがあるなど気付いた。

「この朝一番俺の背中に軽く体当たりしてきたりして、今日はも今日とて元気いっぱいの女の子は俺の幼馴染の望月愛だ。むちづきあい

程よく伸びた髪は薄く茶色に染まっている。綺麗にまとまつたその後ろ髪を大胆にアップにしていて、ダッカールでデザイン的に固定している。使っているダッカールはピンクの花とかがラメラメの綺麗に装飾されてある。なにやらそのちょっと派手目のラメラメのダッカールに今時の望月さんは、ハマっているらしい。

まあ、正直幼馴染目線でなくともその髪型はよく似合っているし可愛いと思う。そして朝からこの幼馴染の無垢な笑顔を見るとなんとなく気分が落ち着くし、落ち込んでたとしても元気になるような気がする。実は朝、愛に体当たりされて微笑まれると今日は良い事がある噂がある。なーんてな。そんなのないない。

「この学校の女子の制服はセーラー服で、近頃の高校はブレザーや多いなかこの学校は昔から伝統のらしい。勿論男子は学ランだ。なにやら校長の趣味が思いつきり影響している気がするんだけど気のせいかな？でも個人的にもセーラー服つてのにはこう…もんもんとしたこう…うん、すみません要するに好みな訳です。

この桜の咲き乱れる桃色の世界にセーラー服が本当によく合つていて、その幻想的な光景に現れた幼馴染の愛に思わず見とれてしまつていた。

「いつつつ…あのな愛、いいか？日本での挨拶ってのはや…」

「おはよう、雨姫！ほら

なんか悠長に顔覗きこんで微笑んできますかこの幼馴染俺の言葉を盛大に遮りましたよ。

「ああ、なんか腑に落ちないけどまあいいや、おはよう愛。どうした、今日はいつもよりも学校に着くの早いんじやん？」

「つむさこよ、あたしだってたまには早く登校したりするよもう。まあほら、なんたつて春だしね。それより雨姫、なに朝からぽーっとしてん……ああー」

「うん」

愛にはなにも言わずとも俺の考えている事が伝わつたらしく、愛も少し目を細めて感慨深そうにこの桃色の風景を眺めていた。ゆっくりとした時間を桜が彩つていく中、愛は軽やかにステップして俺の前に出てきた。

「雨姫、早く行こう？ 遅刻しちゃつても知らないよー？」

「ああ、うん。今行くよ」

そんな他愛もない、けれど確かに平和な何気の無い朝のやり取りはまだ少し高校に慣れていくなくて緊張した心や体をほぐすには十分だった。ふわふわと桜並木を歩いていく幼馴染の姿を後ろから眺め、ポケットの中の iPod を操作し電源を落とすと、桜舞い散る道を

学び舎に向かって俺はやつてこないがお任せした。

\* 1・2色 桜色の学舎（後書き）

でましたよ幼馴染。

雨姫の幼馴染の望月愛です。

とっても愛嬌のある明るい娘です。

今回は姫神高校と姫神山の風景描画に挑戦しましたがうまく伝えられないか、自信がありません。（笑）

綺麗な桜の風景に、雨姫はヘッドフォンから流れる音楽も相俟つて見とれてしまいます。

仲の良い友達との絡みにしても、毎日変わる風景にしても。

足早に去つていく幼馴染の背中を見届けて、桜の花弁が舞い散る中。玄関先で肩に付いたひとひらの花弁になんとなく愛着が湧いて、玄関に入つて間もない所にある傘置き場にそつと置いた。

もしかしたら風に乗つて置かれっぱなしのどれかの傘に入るかも知れない。傘を開いた人が驚くかもなんて思つてたらなんだか笑えてきた。

まだ入学して間もない為か、玄関を通るのにまだどこか少し緊張した。下駄箱にて上履きに靴を履き替える際、肩に掛けている鞄がずり落ちそうになって背負い直す。

校舎に入るとそこからまず目に飛び込んでくるのは綺麗な中庭。綺麗に配置された大きくて立派な木々達は春の陽気にぽかぽかと照らされ、心地よい木漏れ日が中庭の草花に差し込んでいて纖細で鮮やかに見えた。

沢山の緑は今日もふわりと揺れて、登校してくる生徒を優しく出迎えてくれる。

だがしかし今日は、時期も時期なので部活の勧誘陣がそこには待ち受けていた。それはもう廊下いっぱいに。そりゃまあ、新入生が入ってきたら部員獲得の為に精を出すものだろうけれど、その光景はなんとも圧巻だった。

みんな朝だというのに腹から声を出しているし、コニーフォーム姿、柔道着、演劇の衣装やらなんだかもう、玄関前の廊下が軽くお祭り騒ぎみたいになつてている。

入学してから知ったことなのだが、この姫神高校はイベントや行事などには何気に全力なのだ。それはもういちいち熱くて火傷するんじゃないかななんて思う程に熱い。修造並。

今思えば入学式に日、先輩方に俺たち新入生はかなり熱く歓迎されたものだ。

廊下や掲示板は勿論のこと、まさかトイレにまで「入学おめでとう！」と張り紙されていたのには流石にびっくりしたけれど。

まあ兎に角俺はこういった何事にもいちいち熱くなれる雰囲気がとても気に入っている。だって折角の高校生活だ。一つ一つの行事を全力で楽しみたいし、そんなイベントでなくとも一日一日大切にしたいからな。

「野球部どうつすかー！？一緒に甲子園出指しまじょう。南ちゃんみたいなマネージャーも大募集です」

「サッカーやりませんかー？ボールは友達。」

「一緒に演劇してみませんかああ？」

「柔道部に入つて身体を鍛え、柔の道と一緒に歩まないか？」

だから今日も玄関周辺は様々な呼び声で溢れている。

バスケやサッカーは中学生の頃に体験入部したことはあるし、体育でも授業でやったことがある。

まあ頗る不出来だつたため入部の方は早々に辞退した。バスケではシューートしても的外れな所に飛んでいくし、サッカーに至つては走つて皆についていけず、動きに合わせることができないからバスだつてもらえないし。

サッカーフてグラウンドで孤独と戦う競技だつたつけかなと勘違いしたほど、バスはもらえなかつた。

どうも俺は運動があまり得意な方ではないみたいだ。認めたくなかつたけど。

運動会や体育の時間で痛烈に思い知り、中学の後半にはそれを認めざるを得なかつた。御陰様ですっかり運動不足だ。

廊下の激しい喧騒をなんとか切り抜け、運動部の勧誘係から半ば無理矢理に持たされた部活紹介の用紙を軽く見た位にして鞄に詰め込む。

実は入学式以来ずっと文化系のある部活の勧誘を待っているのだけれど。

何気に気になっていたのだがあまり活動的ではないのだろうか。もしくは勧誘する程部員に困つていないとか。

あれ？ もしかして…ないのか？いや、まさかな。

そんなことを思つていると丁度前から先生が教科書を抱えながらゆっくり歩いてきた。現国の教科書を持つているから、きっと現国担当の教師なのだろう。

渋めのグレーのスースを着ていて、恐らくポマードを使つていてるであろう整つた髪型をしていて、少し瘦せている先生だった。

「あ、おはよびざいます。すみません先生、いきなりで申し訳ないんですが、一つ聞いてもいいですか？この学校に現存している部活のリストとかって、職員室とかにあるんですか？あるなら是非見てみたいんですけど」

「おはよ。ん？ああ新入生か。入学おめでとうね。部活のリスト？ああ、えっとね、一年担当の教師達が今朝会議とかしてたみたいでさ、一応部活要項のプリントでも配るべきだとか話していたみたいだよ。だから確か今日の朝のホームページで配るって言つていた気がするから、多分もう少ししたら見れるんじゃないかな？」

くしゃっと顔を綻ばせ、まるで仲良しの親戚のおじちゃんのように笑う。雰囲気がいい先生だなと思った。第一印象つてやっぱり結構大事だよな。

現国は是非ともこの先生に教えてもらいたい。

「おお、本当ですか？そつだつたんですね。ありがとうございます。御座いました！」

なんとこれはタイミングがいい。教室へと向かう足取りが少し軽くなつた。

まだ慣れない新しい環境は容易に気分を高揚させたり緊張させたりする。もうクラスメイト達はみんな登校し終わつてゐるのだろう

か。俺が一年間過ごす教室はこの階段を上がった先にある一番奥の、  
教室だ。

教室に着くと、まだ新しい環境に慣れない生徒達独特の空気感がゆつたりと漂っていて、どこか皆落ち着かずソワソワしている気がする。

キヨロキヨロしている人や、読書に没頭する人。窓の外を眺めながら音楽を聴いている人、同じ中学出身の友達とおしゃべりしながら知らないクラスメイトを横目で気にしている女の子のグループ。まだ入学して間もないことだし、これに関してはやはり自分を含めてだけど。

けれどまあ徐々にそんな空氣もこの春風に乗つてどこかに行つて

「おまよつ古面。今日はめざりめざりだつたな。」

自分の席に着いて、鞄の中身を整理し終わり、首に掛かっていたヘッドフォンを外して鞄にします。

「ふう、おまえがどうぞ」と、その男は話しかけてきた。

この二つの名前は櫛枝 蓮時。わりと物静かで一見クールだけど程よくぐだけていて絡みやすい。話してみてわかったのは漫画や小説、アニメが大好きで結構そつちの方はいけるクチらしい。

そして短い髪で一重の瞳はなにかと誤解されかちみたいたけど、俺からみたら整った顔立ちに髪型もよく似合つていて格好良い。おまけに性格もすぐ良かつたりする。

実際話しかけられるまでは、悪いことしたつけかなと思う程にな  
ぜか睨まれてるな…とか、そういう風に思つてから櫛枝つて  
人はあんまり話しかけられたくないのかななんて、正直怖かつたり  
した。

初めて話した時の会話の内容は漫画の話だった。俺も漫画が大好きだったから、蓮時と仲良くなるのに時間はあんまり必要じゃなかった。

「ああ、おはよう蓮時」

「今日も部活の勧誘すごかつたな。古音もやつぱり？」

蓮時は大量の紙束をひらひらさせて苦笑いすると、俺もちらりと鞄の中の紙束を見せれば苦笑いを被せた。

そしてお互い机に大量の部活動説明紙束を並べ、眺める事にした。

「そういえば蓮時はなにかやりたい部活はあるの？」

「いや、まあ中学の時はバスケットボールだったんだけど高校ではどうかな、実はまだ全然決めていない」

くつ… そうだった。この櫛枝蓮時なる男は運動神経がすごぶるいいらしい。スタメンだつたって言つてたし。どこだつけるかな、ポイントガードだつたかな。…なんかかっこいいな。

ただこのときの俺の半端じゃない悔しさに全米が涙したことこの男は知らないのだろうな。

「折角バスケでいい感じだつたんなら続けたらいいんでない？ 諦めたらそこで試合終了だよ？ 楽しそうだしかつこいいじやんバスケ」「その物真似びっくりする程似てないな。まあん… 確かに結構前から誘われてはいるが、折角高校に来て、新しい環境なんだから俺は出来ればなにか新しいことをしたいな」

「弓道部とか、ちょっと気になるかもと屈託のない笑みを浮かべて蓮時はそう言つた。弓道部か、確かに渋い。落ち着いて格好いい。そして俺の物真似はそんなに似てなかつたのか、自信あつたのに。「なるほどねえ。俺はさ…」

と、言いかけた所でホームルームの始まりを告げる鐘が、早く自分の席に戻れと急かすように教室に鳴り響いた。

蓮時も鐘の音を聞くや否や軽く手を上げて自分の席へと戻つてしまつた。

ええー俺、まだ喋りきってないのに…。今日一度田の遮りに少し  
だけ、ほんの少しだけだけど切なくなつた。

廊下では走つてギリギリセーフを狙う人などの喧騒で結構騒がし  
い。教室の中もまだ話足りない女子や男子が自分の席へと渋々戻る  
とまたすぐに近くの友達と話し始める。

昨日見たテレビの話や趣味の話、高校で習つ勉強の話。お互いを  
もつと知つて仲良くなるように話に花を咲かせている。先生がくる  
まではどのクラスだつてどの学年だつて大概そんなものだ。

そんなことを考え、ふと前の席の方を向くとそこには今朝のコン  
ビニの娘が息を切らして座つていた。

確か名前は離墨梓ひなづみあさ。なんだか入学式に初めて顔をあわせてから妙  
に記憶に残る名前と雰囲気だつた。

どうも彼女は今ギリギリで着いたらしく、バタバタと席に着くと  
息切れした小さな声で、

「ま、間に合つたあ…良かつたー」と声を漏らしている。まあぶつ  
ちゃけ全然間に合つてないんだけどね。

あれからまたしばらくコンビニで悩んでいたのだろうか?…だとし  
たら、とてもマイペースというか。ゆっくりな人なんだな。

彼女はまだヘッドフォンをつけている。取り忘れているのか、ま  
だ音楽を聴いていたいのかそうゆうデフオなのか。うーんなんか可  
愛い。

流石に俺はもう外して鞄の中だけれど。

そして音楽好きとしては多分…まあ多分皆も同じ事だと俺は思つ  
ているんだけど、どうなのかな?つてか少なくとも俺はそうなんだ  
けど。

イヤホンやヘッドフォンを付けている他人が今なにを聴いている  
のか、その音楽再生プレーヤーには一体何を入れているのか。どん

なジャンルの音楽が好きなのか。これ、すつじに気になるんだよね。

「うわひやあっ」

小さな体がびくうううと揺れた。ちょっと話しかけよつと思つて小さく肩をたたいたらなんと可愛い驚き方だりう。でもなんだろう、少し悪いことした気持ちになる。

けど音楽に気持ちが、意識が深く深く入つていると、些細な事でも過剰にびくうしたりするんだよね。わかるわかる。すこくわかる。俺も何回も同じ体験を経験していますから。

やがてゆつくりとヘッドフォンを外すと此方へ振り向き

「す、すすすみませんっ、音楽に夢中になつてつー！」

あわあわと手を右往左往させている彼女は、肩にかかる位のうすい桃色の髪をしていて柔らかな雰囲気。

その髪にはゆるーくパーーマがかかつていてふわふわだ。思わず触りたくなる衝動に駆られたのだけれどなんとか抑える。

なんかこう…小動物みたいで可愛がりたくなる。少し低めの身長がまた可愛さに拍車をかけている。つかヘッドフォンつけてる娘つていいなあ。いいよね？完全に胸にキュンつてくる。離墨さん凄く似合ひつなあ、ヘッドフォン。

「あ、うあ、いやこつちこそいきなりごめんっつーべーっと、名前俺、古音雨姫つていうんだけど」

「あ、はい。私は離墨梓つていいますーえ…つと。雨姫君よくヘッドフォンしてなんかちょっと氣になつって。私、名前入学式の日に覚えてましたよ」

初めてこんなに彼女と言葉を交わし、初めて感じる彼女の屈託のない物腰とふわりとした微笑みや優しい声質。

彼女の綺麗な瞳を見つめているとその中に吸い込まれるような錯覚に陥りそうになる程に、可愛い。

つてかあれ？俺の名前覚えててくれたんだ。しかも気になつてたなんて、それはばり今日まで俺が思つていた事なんだけれど。

なんだか得体の知れない嬉しさが心の奥からじわじわと溢れ出し

てくる。

そつか、俺だけじゃなかつたんだ。彼女も見ててくれていたんだ。

「えつと、離墨さんは」

「いやいや、全然梓でいいですよ？名前で呼んだほうが、親近感も沸くし」

「本当？んんー…じゃあ、ちょっと恥ずかしいけれど梓って呼ぶよ。あのや、今日朝信号待ちしてるときコンビニのほうをちらりとみたんだけど、梓なんか飲み物もつて悩んでたよな？」

梓はみてたんですかあー！？と両手を頬にあて、顔を赤らめると話しかけてくださいと軽くどつかれた。

右肩に下辺りに思いつきり入ったね。これが何気にちよつと痛かつた…。まあすぐ後であわあわ言いながら謝つてくれたのが小動物みたいで可愛かつたから良しとしよう。

「あれは、なにを悩んでたの？」

「あれはですね、今日のお昼もしくは休み時間に飲む為の、苺牛乳とフルーツ牛乳で悩んでまして…」

「あー、成程ね。その一つで悩んでたんだ。どっちも捨てがたいなー。うんうん。で、どうにした？」

「コーラにしました」

「ううええええふえええっ！！」

「ちょ、おまつ。この日一番のずつこけを披露した。それはドリフのコントばりに。机が壊れたかと思うくらいに激しくだ。

だつて、それはもはや牛乳じゃないしな？」

つーかもうジャンルが違うよな、乳製品つていうカテゴリーから逸脱しちゃつてるし炭酸だしな。いやジャンルとかの話じゃないかこれはもう。面白さのレベルが違う。

ああわかった。この子天才なんじゃないかな。天然だけど、この調子でボケられたら笑いすぎて腹筋が崩壊してしまつ。

そしてこれから梓と音楽の話を展開させようと話題を変えようとい

したら思つたら担任の先生が教室に入つて來た。

梓は先生に氣づくと俺にしかわからないような田配せをして小声で「『じめんね。じゃあまた、後でね』と呟いた。

今日は盛大に遮られるな。三回田は流石に…きつい。今日は良い事起こりそうだったのに。よし、俺ちょっと泣いてこようかな。

あれ？ けどまでよ…？ また後で、だつて？

おお、なんか俄然元気が出てきた。ふへへ本当に男つて生き物は単純なのだ。

「みんなおはよーう。じゃあまずこれ。今朝配られたんだけど、まああれよね。この学校の部活動リスト。これみて参考にするといわ。よくみて決めるようになー」

担任の女教師、中野先生の明るい声が響く。新任ではないけれど、かなり若い先生だ。

髪のアレンジの仕方は雑誌のモデルみたいに斬新で、ブランドもの立派なスース。なんか色っぽいようなそうでないような。けど整った顔立ちをしていて早くもクラスの人気教師になっていた。

前の席から順々に後ろにまわってくる紙を見て、クラスがまた思い思ひに喋りだした。

そして梓から手渡された部活動リストを片肘ついて眺める。

「はああん、やっぱ運動部は沢山あんのなー。」

今朝勧誘を行つていた部活の名前をさうつと見る。そして視線は上から下へと徐々に文化系一覧へ。

……………ん？え？

なにこれ記入ミスなのかな。

なんで文化系の部活欄には演劇と吹奏楽部としかないんだ？ これつてなにかの冗談としか思えない。

あ、もしかして新入生に対する盛大なドッキリなんじゃないの？ これ突然の戸惑いに少し目の前の景色が歪んだ。

「あの。中野先生、文化系の部活つてこれですか？」

思い切つて聞いてみた。これは流石に記入ミスだろ。だつてほか

にも沢山あるはずじゃないか。茶道部とか科学部とか手芸部とかさあ！

「ん？ ああ。 そうね、 その2つ以外は廃れていって廃部になつたんだよね残念ながら」

そう衝撃の言葉を言い放つとあははと教壇で無邪気に中野先生は笑っていた。

「 「ええええええええ！！？？」」

一つの声が綺麗にユニゾンした。

その声の主の名前は田の前にいる離墨梓だった。

俺と梓はしばらく見つめあつた後、 2人は力なく机に突っ伏したのだった。

\* 1・3色 革翠の姿（後書き）

でもじたヒロイン。

ひなわみあわや  
雛墨梓と申します（\*・・・）

おひりみいりよこだナビビンかのござつしているふわふわ美女です。

よしあく仲良くなれそつなフリグがたちましたね。

ああああはこつたいどんな音楽を聴いてるんでしょつか。

中野先生からの衝撃のあの発言から何時間が経つたのだろうか。

頭はそのショックで完全に呆けている為、朝から授業はまともに受けることが出来なかつたと思う。ていうかうん、ごめん全然出来なかつたな。

授業の途中何回か当てられたけれど答える事は全く出来ていなかつたと思う。頭がぼんやりしていてよく覚えていない。隣の席の優しい方に教科書何ページかこいつそり教えてもらつたのは覚えているんだけれどなあ。なにか珍解答してはないか今更ながら不安にもなる。

そして気付いたらもう放課後、つてくらい体から魂が抜けたかと思つ程に無意識だつた。それほど朝のホームルームでの中野先生の発言は、俺にとつて衝撃的なものだつたのだ。

俺は、どうしても軽音部に入つてみたかった。中学校の頃からずつと底知れない憧れがあつた。

今まででは趣味で音楽は沢山聴いていたし、ギターもやつてきた。客観的に見て聴いてまあこの際上手いかどうかは別にして、それでも高校に入つたら軽音部に入ろうと決めていたのだ。誰かと熱く音楽について語りあつたり、お互いの音を満足のいくまでぶつけ合つたり。みんなの好きなバンド、アーティストの音楽をカバーしたりコピーしたりして、そんな風に毎日沢山ジャムつて。

そうしてスキルをあげていつて、自分たちのオリジナルの曲を作つていき、ライヴハウスで観客にヘッドバンкиングやモッショモッシュ。そんな風に考えていたのだ。胸がはちきれるかと思うくらい憧れていた。

そうやつて高校生活は大好きな大好きな音楽に埋もれて過ごすつもりだつたから、今の落胆の程は察してもうらえると思う。

「いやー…冗談だろ…？」

そう呟いて何度ものかかまう解らないのだけれど、机に力なく突っ伏してしまつ。嫌にひんやりする机の表面はどことなく宥められている気がした。

机に向かつて力無くあつあつ言つていると、どこかに出かけてきたのか梓が教室にとてとて入ってきた。

そういえば梓もあの時先生の言葉に驚きを隠さず俺と一緒に声をあげていたつ。何だろつ、梓もなにか探している部活があつたのだろうか。

もしかして…軽音部??だとしたら尚更惜しい。こんな娘と活動できないなんて、そうなるとリストになかったのが非常に非情に悔やまれる。

「ねえねえ雨姫君、雨姫君」

話しかけてきた梓の表情は何故かとても明るい。何か良いことでもあったのかな。今朝は俺と同じで机に突っ伏してたはずなんだけれど。

もうなんかウキウキしているのが周りに空気にだだ洩れしちゃつてこる。そしてよく見ると梓の両手にはパックの飲み物が優しく包むように握られてある。

「どつちがお好みですか? 私今買いにいったら一いつでてきたんです

つ

そう言つて学校自慢の一一面いつぱいに広がる満開桜を思わせる満面の微笑みと共に差し出されたパックの飲み物はといふと、ちよつと皿を疑うような物だった。

一つはオレンジと表記されたフルーツ系飲料だろつ。爽やかな印象を与えるパックは流石。今すぐに口の中をオレンジの香りでいっぱいにしたくなる。

だがもう片方は一体なんだろつ。

「マンゴーと餃子が出会っちゃいましたテヘ」つて書いてあるんだけど。

あれ? 嘘だよね?俺曰、疲れちゃつたのかな? あ、そつか今日シ

ヨック受けてそれできつと幻覚見ちゃつてるとか？

だつてこのカップルつて成立するんだつけるつてか出合つちゃだめなんじやないの？そんな飲み物この現世に存在するのですか？つてかテヘってなんだよ。大事な事だからもう一度言つけどテヘつてなんだよ。

でもまあ目の前に現物があるので、うーん…とにかく開発者を呼んできてくれないか。お茶でも飲みながら段階を踏んでゆつくり話がしたいんだ。

「あー…うん、じゃあ俺はそつちのオレン」

「やつぱり雨姫君はこっちなんだ！？流石、攻めるねええ」

と、二口二口顔で手渡されたパックの文字はもう俺には涙で霊んで読めないけど、きっとオレンジつて書かれているんじゃないかな…。書いてるよね…？

静かに鞄にその怪しい飲み物を仕舞う。これは流石に今は確認することも飲むこともできない…。心が折れてしまいそうだ。

後日改めて挑戦してみよう。だめだつたら…蓮時か愛に飲ませよう。うん、それがいい。

「そりいえばさ、梓はなんか文化系の部活に入らうと思つてたりするの？」

だつて、あの時。梓はもの悲しげにしていたから。俺と一緒に声をあげてからは、どこか哀愁感が漂つていた。放課後になつて、今になつて漸く話すことができたくらいだつた。

まあそれに関しては人のこと言えないんだけど。自分もだし、

梓の落胆も相当だつただろうから話し掛けるのに気が引けたのだ。「あー、はい。えつと…私、油絵とか絵画とか水墨画とか、欲張りですけど兎に角なにか書くことが大好きなんです。だから高校に入つたら絶対に美術部的な部活に入らうと思っていたんですね」

あはは…と笑つて見せるその無理矢理作つた笑顔に俺の心の奥深くの何かが触れた。自分でも正体の解らない焦燥感に心が焦がれる。何とかしてあげたい。取り繕つた笑顔じゃなく屈託のない笑顔が

見たい。なんかもう自分の事は棚に上げてしまつてもいい。いや、それくらいにっこりこことでね。

梓は本当に美術部に入りたかったのだ。こんな哀しげな表情をしてしまつほどに、だ。まだ実際に見たことはないけれど、この娘はきっと楽しそうに描き、素敵な作品を描くんだろうな。

なんとなく作業をする梓の姿や表情を妄想して、やつぱりその姿を実際に見てみたいなど強く思つた。

「俺はさ、俺は音楽が好きなんだ。大好き。音楽がなかつたら生きていけないって断言できるほどに、それほどに好きなんだよ」「うんうん、いつもヘッドフォン付けてますもんね？私も大好きだからよく付けてますけどね」

ほら、今も首にぶら下がつてますよーと微笑みながら梓はヘッドフォンを撫でていた。

「うん。まあ……だから軽音部があつたら是が非でも入りたかったんだけれど」

なかつた。なかつたのだ。軽音学部も、梓が望んだ美術部さえも。こんなにも切望していたのに。

そんな時だ。梓がなにか閃いたかの様で、ぱああと微笑み、ウキウキした様子で前のめりしてきた。俺の机がミシミシと小気味良い音を奏でる。おいおい大丈夫か？俺の机。

「雨姫君、私良いこと思いついてしましたよ」

なんだろう、このとき不思議な体験をした。

頭の中にふわりと音楽が流れ込んできたような気がした。その音はなにかに形容する事は容易でなく、ただただ優しい音色。

その音楽と一緒に優しい色彩も頭の奥深くからとめどなく溢れてくる。様々な色が頭の中を彩つていいく。合わさって淡くなつて、薄くなつて混ざつて、濃くなつて。

音楽と色彩が互いに混ざり合い、見たことのない異空間が出来上がりてしまう。

これはきっと錯覚ではない、と思つ。勿論根拠もなにもないのだ

けれど。

どんどん描かれる抽象画のよつな色彩と優しい音色は徐々に消え、薄くなっていく。そこには一つの映画を見終わった後のよつな心地よくてどこか淋しげな感覚だけが俺を取り残して消えてしまった。そして。

「ねえ、部活。私と一緒に作らない？」

なんとなく返答しようとしたのだがうまく言葉に出来なかつた。意表を突かれた、とも違う気がする。けど放たれた魅力的な提案に心は確かに躍つた。

「あれ？ ねえねえ雨姫君、聞いてる？」

「あ、ああ。聞いてるよ、聞いてる」

「良かつたらや、部活一緒に作ろうよ～私と

「で、でもさ。梓は美術。俺は音楽だろ？」

「美術と音楽の混合部活でさ！…それってなんだか面白やつじやないですか？」

「まあそれは確かに……」

度肝を抜かれた。何を言こ出すかと思えば部活を作りつと聞こ出すのか。

でもこの提案には正直内心はワクワクしていた。この何も無い状況からのスタートは結構悪くない。というか嬉しい。その発想はなかつた。

けど、美術と音楽が合わさって一体何をやるのだろう。こまいちピンとこないまま、梓は話を進めていく。

「私は絵を描きます。勿論雨姫君の作ったバンドのお手伝いもしちゃいます。」

「そ、そうなの？えつと…じゃあ…俺はバンド作るよ。後は…梓の手伝いつてか、集まつたメンバーと梓とでなにか作品も作つてみたいかも」

そう言つと本当に？嬉しい！と梓は微笑んで手を握つてきた。ヤ

バい、照れる。顔、今どんな色になつてんだろ。

なんだかあつさり決まつてしまつたが、梓と一緒に部活を作る事になつてしまつた。マジでか。兎に角梓とこれからしなきやいけないことを話し合つた結果を要約するといつだ。（といつか主に俺が決めてしまつた感が否めない。だって梓は話を脱線させてばかりで話が進まなかつたのだから仕方ない）

1、活動内容を明確にする。

2、部活の名前を決める

3、メンバーを集め（とりあえず4～5人は居たほうがいいと思う）

4、部活公認の為交渉及び手続き

最低限これくらいは早めにしつかり決めないとだなつて思つ。

けれどはつきりいつてまだまだ穴だらけなんだよねこの計画。空いている場所も機材も画材も恐らくは無いだろうし。なによりそんな怪しい部活に入りたい人間なんて…いないと思つ。

つていうか気が付けばちゃんと部活化を実現しようと頭をフルに使つている。いつのまにか引き込まれていた。部活の魅力がそうさせてるのか、梓の力なのか。

状況は芳しくないけれど、だけビビンカ間違いなく気分が高揚している自分に気付く。うまくいくもなにもまだなにも始まってないけれど、はつきりいつてもう既に楽しい。とあるRPGで、漸く銅

の剣を買った時みたいな感じ。わかんないか。

「じゃあとりあえず部活の名前、どうしようか?」

「そうですねえーーーあつーー芸術研究部はどうですかね?」

「ああいいねえ……つてちょっと、音楽はどこに行つたんだよそれ

「えーと…あつー芸術とは音楽も含まれるのです」

うーん。うまく言いくるめられた感。しかも、あつーつて今思い

付いただろ梓。

でも確かにその案は巧いかもしれないな。俺もなにか考えないと。などと考えていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。これは偶然か必然か。この姫神高校で新しくできた友人、蓮時が都合よく現れたのだ。

「おお。どうした古音??まだ残つてたんだな。」

蓮時はただ暇だったのかそうでないのか定かではないが教室には鞄を取りにきたらしい。

そういえば改めてみると蓮時は身長もあるし一重でかつこいい。こいつは近々恐らく女子にワイワイ言われるのだろうなとか考えてたら色々と少し億劫になつてきた。

「なあなあ蓮時、確か部活まだ決めあぐねていたよな?」

「まあ、そうだけど…って、いきなりどうした?」

「うん、これから俺ら部活作るから蓮時入つてくれるかな?てかいよね?おつけ決まりなー。よしあや決まりー」

なんか「ちよつー」とか「説明してくれよ」とか滅茶苦茶聞こえるけど、空耳ダヨネ。

入部届けたるものはないけれど、一応簡易的だけどさつき梓とメンバー表を作成した。

なんだか落書きだらけ(その落書きとは完璧十割梓が書いたもの)で不恰好だけどそこに三人目の名前を記入する。まあ…すまん勝手に。

「古音、離墨さん、どうかせめてなんの部活なのか位教えてくれな

いかな？」

「あ、うん。 そうだよねー。 雨姫君、もつ櫛枝君にいざわるしたら、めつだよ?えっとね、簡単に言つと私は美術関係の部活がしたくて、雨姫君が音楽関係の部活がしたかったんですよね。で、お互い入りたい部活がなかつたんです。それで、じゃあもう作つちやおうかみたくたつた今なりましてですね…」

「部活の名前もろくに決まってないしメンバーも当然ながら俺と梓の一人しかいない。これじゃ部活として認定されないかも、さてどうしようかって話をしているとそこで蓮時が丁度現れましたと」

「お前らむちゅくちゅだな!!!!」

そう叫ぶように言つと急に蓮時が笑い出した。蓮時がこんなに笑つてているのは正直みたことがなかつた。最初は嫌がつてると思つていたんだけど、そうじやなのかな?無理矢理誘つてみて正解だつたかもしれない。誰だつてこんな誘われ方や部活内容も定まつていな部活なんて警戒するよな。

「はは、いいよわかつた、やるよ。こんな高校生活の始まりも、うん。悪くないな」

そういうて蓮時はふわり微笑むとしかたねえなんてぼやきながら近くの席にどかつと腰をかけた。

勢いで三人目の部員を確保できてしまつた。何気に順調。あと一人、いや一人は欲しいところだなあ。

因みにこの後、蓮時から実はドラムをやつていたんだと打ち明け話を聞いて俺は、バンドに一步前進できた喜びと一緒に神様の理不尽さと嫉妬で怒りに震えたのは…

そう、誰も知らない。

\* 1・4色 紅蓮の放課後（後書き）

ついに動きだしました謎の文化系部活。  
軽音と美術、うまく纏まるのでしょうか。  
部活の内容が気になりますがこの躍動感、ちょっと中に混ざって活  
動したくなります。

## \* 1・5色 瓶覗色の空景

今日一日で急に色濃く展開し始めた新しい高校生活。ずっとしたかったことをしようばかり阻まれ、それから机に突つ伏して絶望していたその日の内に救いの希望は舞い降りる。一人の女の子のたつた一言で、だ。

青い春の神様はまだまだ俺を見捨てではないみたい。というかむしろ愛されてたりして。

まさか自分達で部活を立ち上げるなんて夢にも思わなかつたから、今の状態が冗談みたいに笑えてくる。だつてこんなアニメとか漫画の世界だけだと思つていたし。

けれども、この状況はもしかしたらといつか絶対、普通に部活に入つて何か活動するよりも数段楽しいのかもしね。

何もない状況から部活を立ち上げる、仲間を一から探す、部活名を考える等の体験は滅多に出来るようなことではないから当然貴重だし、なにより充実感が半端じやない。本当にアニメとか漫画みたいた。

俺らはあれから段々空の青が薄く、色々な色が混ざり合つて、そして赤みがまして焼けてきた空の様子が窓から見える教室で暫く話をしていたんだけど日も暮れてきたから学校を出ることにして、一秒だつて同じ色じやない、どんどん色合いが変わつていく橙色に染まつた街にゆっくりと足で向かつた。

太陽の高さや雲の量や位置、流れ方や形でどうしてこんなにも色々な表情で魅せられるのだろう。昔から空を見上げる癖があるので一度だって空を見上げる事に飽きたことなんてない。

毎日違う空の様子と色に目を奪われ、何事もなかつたように消え

てしまつ雲と現れる雲に気持ちがすうつとなるのを感じた。首にかけてある音の流れていなヘッドフォンからはなにか綺麗な音が聴こえたような気がした。

帰り道、三人調度小腹が減つたし、まだもう少し話がしたいと意見が合致したのでとりあえず近くにあった某ハンバーガー屋に入つてまた少し話することにした。

「ううーん、んんんーどっちにしようかなあ…」

蓮時も俺もそれぞれの好みにあつたハンバーガーのセットを頼み、会計を終わらすと梓がまだメニューを見て唸つていた。ああ、そうだった。こうゆうの迷う娘だつたつけな。

「先に席とつてるからなー梓」

コンビニの件の出来事を思い出し、耐えかねて少し笑つてしまつた。今回は何と何で悩んでいるのかちょっと気になつたけれど、あんまりちよつかいだすのも気が引けるし、そう声を掛けると何度も頷いていたので蓮時と窓際に空いている席を陣取る。

「なあ古音、さつき携帯触つてたけどもしかして誰か呼んだのか?」「おお、なかなか鋭いな蓮時。うん、実は部活に誘つてみようかなと思つてる友達がいるからぞ、さつき呼んだんだ。なんか近くにいたみたいだからまあ待つてればすぐ来るんじゃないかな」

「ふーん」

蓮時は片肘をつき、顎を手の甲に乗せて外を一瞥した。興味が無いような素振りに見えるけれど恐らく興味深々の裏返しなのだろう。まだ短い付き合いだけどそれがなんとなくわかつた。

そのまましばらく蓮時と雑談していると来店した時になる音楽が店内に鳴り響いた。

すぐにこないとこをみるとなにか注文しているんだろう。  
つていうかあれ? 梓はまさかまだ悩んでたりする? これは期待大。

「雨姫ー、きたよー！」

元気いっぱい、満面の微笑みで近づいてきたその女の子は制服を着ていて、綺麗な薄い茶色の髪をアップにしている。ダッカールはラメラメでキラキラしている。

幼馴染の望月 愛だ。

「あーーもうあたしあ腹すいたよー、あたしハンバーガーセットにもう一つハンバーガー頼んじゃつたわえへへ」

相変わらずよく食べるなあと感心しているといきなり体にどんつと軽い衝撃が走る。ああ、愛が隣に座ったんだな。なんでこの幼馴染は俺に何かと体当たりしてくるんだろう。隣を見ると首を傾げて微笑む幼馴染。くそぅ：なんか、なんだかいい匂いがするしなんか首傾げて可愛いしどれだけ搔き乱されるんだよ俺。まあ結局全然嫌じやないし許すんだけれど。

そうこうしているうちに梓が注文を終えたのか、俺らの座つている席に向かつて歩いてくる。

「あー、あずあずつ、どもども。あたしきちゃつたよーん

「あー、愛ちゃん。来てくれたんだあつ！わーい」

いやー女子のキラキラしたこの感じ、すごいいいよね。女の子同士が笑つていると世界が粒子レベルで華やかに色付くよね。ただのハンバーガー屋も梓と愛を店内に置くと特別に感じる。

あれ？てか愛はいつの間に梓と友達になつていたんだ？ちょっと気になる。まあ入学式からわりともう時間もたつたし仲良くなつてもおかしくないか。

そしてそれぞれが席について軽く雑談していると、注文したハンバーガーセットが運ばれてくる。美味しそうな香りがテーブルを包み込む。自然と涎が出そうになり、改めてハンバーガーの美味しそうな香りの攻撃力を思い知ったのだった。

因みにファーストフード店は極力避け、食べないようにしている。ハンバーガーは勿論美味しいしどちらかといえばかなり好きなほう

だ。大好きなんだけど、如何せん価格が高いのだ。その分を近くのスーパーで買う食費に回せれば結構買えてしまう。

一人暮らしで料理したりしているから、少ない費用で沢山買えるスーパーに食費を回したい気持ちになつたりと、もう既にお金に関しては割と敏感になつてしまつた。

ああ、若干高校生なのにこの堅実さには涙が溢れてくるね。  
だけれどこうやって友人達と夜ご飯を共にし、わいわい話をしながらというのはいわば Princeless、大切な時間。こうゆう出費に関しては俺は惜しまない。

「えーと、こりゃまた珍しいメンバーが集まつたねぇ雨姫。なにに、秘密会議でもするのかい？てかあたしにはなにか用事だつたの？」

セツトのポテトをモシャモシャと食べながら愛は此方を向き、ふわり微笑みを浮かべると首を傾げた。

そう、幼馴染みの望月 愛を部活のメンバーとして勧誘しようと思つて呼んでみたのだ。

「あ、あのさ。今日部活のリスト表渡つたよな？それでさ、ハッキリ言つとその中に俺が高校生活でやりたかつた部活がなかつた訳なのよな、俺も梓も。」

「あー、やっぱりそうなんだ？なんか一人して朝のホームルームでびっくりして声上げてたもんね」

あれには流石にびっくりしたよーと愛は苦笑いしてみせた。

「うん。それでだいぶ落ち込んでたんだけど、梓からの提案でな、部活がないのならいつそ部活を作ろうってなつたんだよ。所謂、軽音楽と美術の混合の部活。なんか伝わりにくいだろ？けど現状そんな感じなんだ」

この話をしてる間中、梓は食べている手を止めて時々頷きながら聞いていた。そうだ、梓も新しい部活を作るのを切望しているんだ。普段のふわふわした印象を感じさせない芯のある眼差しは俺の言葉を静かに見守つている。

「でもまだ部活申請もしていないし、名前も実はまだ決まってない。メンバーも此処にいる蓮時と梓の3人なんだ。それで」

「それであたしに声をかけたって事なの、かな？」

俺の言葉が終わるのを待たずには言葉を被せてきた。愛の表情を見るも、うまく読み取ることが出来なかつた。嬉しい？のか、なにか哀しい？のか。幼馴染だし愛のことはよく知つてゐるつもりだつたけど、見たことのない複雑な表情だつた。

「あ、あの。私達は別に、ふざけているわけじゃないんです。やるなら本気でやりたいし、本気で楽しいことしたいんです。その仲間に雨姫君が愛ちゃんならつて…」

「うん。ほら、愛は中学校の時に吹奏楽部だつたし、確かコントラバス、ウッドベースしてたよな？…だから

だから俺達と一緒に部活作らないか？そして一緒に楽しい高校生活を過ごしそう。きっと樂しくなるよ。つてか、なるよ。うん、してみせる。

そう愛の田を見つめて言つた。この言葉に迷いなど一切なかつたんだ。

少しピリッとした空氣のまま何分たつただろう。いや実はまだ一分もたつてなかつたりした。そして間を繋げなくなつた俺達は当たり前のようになんばーがーセットのお盆に一本ずつポテトをそつと置いた。

「んな！？」

そしてよく見ると、俺の差し出したポテトが一番短かつた。それも断トツの短さ。親指程の其れを梓と蓮時がしばし見つめれば此方へと視線を移し、凄まじいジトジト視線を投げかけてくる。また、落ち着けお前ら。そもそもそうゆう問題なのか？ポテトの長さの問題なのか？？とりあえずその田をやめてもらつていいですか。

そして愛は俯きながらお盆の端っこに置かれたポテトを眺め、ど

うしていいのかわからなそうに俺に視線を送ってきた。ほら、そういう問題じゃなかつた。

「雨、雨姫のが一番短い……」

さうやうの問題だつた。

「雨姫は、雨姫達はあたしのことを必要としてくれて、それであたしに声を掛けてくれたんだよね？」

「うん。それは勿論そうだよ？」

「そ、そんなの…あたしが断るわけないじゃない……ばか

「ん？今なんて言った？」

愛がなんだか小声で呟いた言葉をうつかり聞き逃す。ほんのり顔を赤らめてポショポショとなにか言つたのは聞こえたんだけれど。わりと大事な言葉のような気がするんだけれど。

「う、うるせー。…わかった。いいよ、あたしも入るよその部活」

「…………本当に！？」

すゞしく嬉かつた。仲のいい幼馴染とも一緒に部活ができるなんて。梓と蓮時も嬉しそうに笑つてゐる。愛はお盆に置かれた、一番短いポテトを咥えて此方を見ていた。宜しくね？と既に微笑む愛を見て、ああ…誘つてよかつたなと素直にそう思えた。

愛は中学の頃にウッドベース（コントラバスとも言つ）を担当していくて実はベースがすぐ上手い。でもエレキベースは多分弾いたことがない。この愛の奏でるウッドベースの音色がとても好きで中学の頃密かに聴きにいつたりしていた。愛はとても魅力的なウッドベースプレイヤーだ。いつか一緒にセッションしてみたいとなあと思つていた事が叶つた。これで、俺が最低限欲しかつた名楽器パートが揃つたからバンドができる。音が出せる。

「でもまあ入ったはいいんだけどさ、まだなんにも決まってないんだよね？」

そう、まだ何にも決まってない。何せ今日発足した部活なのだからむしろ四人集まつた事のほうが出来過ぎなくらいだ。

「じゃあじゃあ、部活の名前だけでも今皆で案を出し合って決めちゃいましょうか？」

梓がそう旨に提案すると全員頷いた。そうだ、まずは部活の名前だ。その部活の雰囲気と田的が一発でわかつて、教師に認められるような、そんな名前だ。

「絵とか美術的なことしつつ音楽をゆるっと奏でる部

「愛とその仲間達の団」

「思い切って…アニメ研究部」

「ちよ、おまえらまでまー！」

ってかおい、だれだ今アニメ研究部つったの。ビームで思って切ってんだお前。うん、間違いない蓮時だ。あれー、蓮時つてこんなに面白かったっけ？いやちょっとといいなつ、正直入りたいなつて思つちやつたけどね…。

愛に至つてはもはや部活名かどうかも怪しこよ。なに勝手に e t c括りにしてんだよ、人を e t cにカテゴリー分けするなつての。その他扱いには「めんだ。

「梓のは名前つてより目的だよな。でもなんか長いけどイメージしやすい」

そう言つと梓はほんのり照れていた。けど本当にこことこつこつする。ゆるつとつてのがなんか俺らっぽい。

「古畠はなにか、考えたか？」

「うーん…『ごめんまだ。でも梓のをヒントに今考えてるところだよ』

また静かな時間が流れた。コーラをストローで吸つたりしながら

夜の帳に包まれていく街の景色をなんとなく眺め、そして頭に浮かんだ1つの部活名を発表するのはなんか恥ずかしさに満ちていて躊躇してしまった。

「あー…じゃあさ、色彩音楽部つて、どう?」

「あ…その名前すごくいいですね!」

「雨姫、それすつじくいこの名前なんだけど、これは暫く大喜利方式で楽しむぐだりだつたんじゃなかつたの?」

「うん。俺もいいと思うよ」

なつ、大喜利方式だと?…しまつた…もっとボケればよかつたのか。これは今晚一人反省会だな…大いに悔やまれる。多分今日寝れない。けれども、みんな気に入つてくれたみたいだしちょつと嬉しい。

「てか、略して色音部?なんかそれっぽいそれっぽい!」

愛は満面の微笑みを見せると、梓と蓮時となにやら興奮した様子で今後の活動について語っている。

思い描いている美術活動と音楽活動の両方の大切な要素を取り込んだ俺達の部活は「色音」という息を吹き込まれ、鮮やかに色めきだす。

早く梓の作品に触れ、愛と蓮時の音に触れたい。混ざり合ひ音と

色は、きっと何にも諦める事のできない気持ちにさせてくれる。

それは昔からずつとじずつと切望に渴望を重ね重ね希つていたもの。

「色彩音楽部、色音…か。」

ぼそっと喜びを噛み締める様に呟く。気付けば暮れていく街の色は瓶覗色から青渴、瑠璃色に染まっていた。

そして目の前に広がっている楽しそうで夢の詰まった会話の中に俺も飛び込むことにした。



夜の帷は街をゆっくりと包み込み、家の電気も街灯もぼつりぼつりと灯り始める。

蠢きだした春の虫達も街灯の光を求めて電柱に集まっていた。あれからまた數十分話し込んだ。勿論色彩音楽部について雑談も交えつつ。

結果、明日試しに早速先生と生徒会に部活動の申請をしてみるとになった。

そして現在店をでて少し歩いた交差点の前。田舎なので、この時間になると大通りなんては名ばかりで人通りも少なく自動車もあり走っていない。自転車がコンビニでも目指してだらだら走っているくらいのものだ。そこで最後の雑談後、別れの挨拶を交わしていった。

俺と愛は帰る方向が同じだから一緒に帰ることに。そして梓と蓮時も途中まで一緒のことここで今日はお開きだ。

「それじゃあまた明日な古音、望月。めまぐるしかったけど楽しくなりそうだな」

「氣をつけてね雨姫君、愛ちゃんー今日はあつがとう。また明日学校でね」

「うん、また明日なー」

「あずあず、蓮、ばいばーい」

暗い交差点でのお互い交し合つた別れの言葉に少し名残を覚えるも、手を振り別れる。

すっかり暗くなつた帰り道を歩きだして、ふと隣の愛を見ればなんだか機嫌良さそうにしている。雰囲気でわかる。部活、きっと楽しみで気に入つてくれたんだなと思つと此方まで嬉しくなつた。

「愛、今日はいきなりだつたけど、その…色々ありがとうございました」

「んーん、全然大丈夫だよつ。まあ確かにいきなりだつたけどね。でもでも楽しそうだし、あたしも楽しみだよつ！明日から忙しいしなんだか青春しちゃうねえつ？」

「うん、本当楽しみだよ。無理だと思つてはいた念願の部活出来るし、何気に興味あつた美術もできる。自分達で部活作れるとか、うきうきしないつてのが嘘だよな」

「あははは、そうだよね。色音部かあ…あたし達の部活」

そう呟けば、星も疎らな夜空を愛は傍げに見上げていた。  
誘つたからには後悔とかつまらない思いはさせたくないなあなんて、夜空を見上げる愛の横顔をちらりと眺めればそう思つた。

「あれ、そういえば愛は自分の楽器つて持つてたっけ？」

「あー…。いやー。えへへー」

そういうつて決まりが悪そく笑つて見せた。

ああ、持つてなかつたんだつけな。幸いにも俺のアパートにベースは一本あるからそれを貸すとして。愛はエレキベースでも大丈夫なのかな？

「うん。あたし多分エレキベースでも大丈夫だと思つ。友達のベース借りたことあつたし」

「ん。なら俺んとこに一本ベースあるから、使っていいよ？」

「えつ、ほんとにつ？うわあ嬉しい。ありがとう雨姫」

「でも、エレキベースだよ？大丈夫？バンドでやるなら一本はエレキ欲しい」とこなんだけど本当は愛、ウッドベースとかのほうが」

「うん。まあ自分のベースもいつか買いたいつて思つてたからいい機会かも。今度買いたいから、その時はベース選び付き合つてよ？」

断る理由が全くない。幼馴染の買い物は苦になるはずもない。ああそうか、買おうと思つていたんだ。愛に合つベースか…楽器屋に行くのは好きだし余計に楽しみだな。

「ああ、今度みんなでいこう。俺もちょっと買いたいものあるし」

「あー。うんそつか、そだね。みんなでいこうみんなで」

「あ、そうだ愛。なにか演りたい曲とかあつたら考えといてな？最初は「ピーしたりしてバンドの手応えとか感じたいからさ」

「うん、わかつた。それって何でもいいんだよね？迷うな…」

ボカラ口からも選んじゃおうかなあ？と嬉しそうに考える姿を見て早く演りたくなった。勿論梓からも色々教わつて描いてみたつて気持ちも加速して。

「俺も何曲か選んでくるから。アンプは…まあ部室あてがつてもらつてからでもいいか」

「うん。部屋もらえなかつたら置く場所なくて大変だもんね。さてさて雨姫はなんの曲選ぶつかなー」

それに関しては選びきれない自信がある。何故ならそういうた妄想は中学校の頃から盛んに行われたからな。脳内サミットの結果は毎回違うし、色んな俺が異論反論で話し合いにならない時もある。いや、なにを言つてるんだろう俺は。

「そうだな、演りたい曲在りすぎて絞りきれないかもなんだよ。それでも選んではくるけれどもなあ」

「ねえねえ、ボカラ口やろうよボカラ口」

暗がりの街頭の下幼馴染みの愛の言つボカラ口とは、VOCALOIDと呼ばれるパソコンのVOCALOIDによるもので、わかりやすいところで初音ミクや鏡音リン、レン巡音ルカなどのキャラクターソフトがある。そのVOCALOIDを通じてネットに音楽を投稿し今日は賑わいを見せている。

某サイトではかなりの盛り上がりをみせていて何十万再生を記録している知る人ぞ知る音楽である。

因みに俺もそのVOCALOIDには興味があつて、自宅のパソコンを使つてしまつちゅう検索しているし、作つている人をプロデューサー略してPとなつていて、色んなPが様々な楽曲をUPしている。興味が尽きないし手を伸ばさなければわからない、それこそ本当に知る人ぞ知る音楽なのだ。

「そうだな。dec027さんや、えこ。さんの楽曲は是非ともや

りたいから多分その2人の曲からは選ぶよ。特にえこ。さんの曲はぶつちやけ全部演れる。それくらい聴き込んだし、音楽もほいのことんさんの歌詞も大好きだしな。decō27さんの曲もできたら演りたいな。機材ちょっと足りないかもだけど」

この会話が通じたのか、愛は酷く嬉しそうな微笑みをみせる。昔からの付き合いだけれど愛のこいつた笑顔はなかなか見れなかつたりする。本当に純粋に嬉しいらしい。

そうして色々な話をしていく内にお互いの帰り道の分岐点に立ち、簡単な別れの挨拶をする。

「じゃあね、雨姫。また明日学校でね」

「うん。今日はマジでありがとう。興奮と反省で今日は寝られそうにないわ」

「あははは…ばか」

笑つて別れる。一応見えなくなるまで愛をみていたんだけど、ちらりちらりとたまに振り返つては手を振る愛はやっぱり俺のよく知る愛だった。

そして帰り道を歩きながら演りたい曲についてぼんやり考えた。楽曲は勿論大切な選択だけれど、あのメンバーで演るつてのがなにより物凄く楽しみで。

そこにうまく梓の美術要素が上手く加われば他では類をみない新しいバンドが生まれるんじゃないだろうか?そして梓の歌声も聴いてみたい。

そんな妄想を延々と考えながら帰路についたのだった。

そして次の日の放課後の時間まで一気に省かせてもらひ。本当はあつたはずの俺のアパートでの生活とか授業や休み時間のたわいもない描写はまたの機会にでも。

まああまり知りたいという物好きはなかなかいないんじゃないと思つ。

~~~~~

「さて、雨姫くん、さあさあいよいよですぞ」  
本日最後の授業、物理が終わって嬉しげにこちらを勢いよく振り向く梓。勢いよすぎでうつとうつくりした。

「よし、このままではつまらなあれだ、先生もしくは生徒会に部活動の申請して、ついでに素敵イベントの事だ。

正直こんな不得体の知れない部活動は認められなさそうだなって未だに思つたりもする。ラノベやギャルゲー辺りのセオリーだと大体最初は突っぱねられたりなにか問題が発生したりするものなんだけれど。うーんどうかな。

「じゃあとりあえず行ってみるか。まず生徒会室が妥当かな」

机の横に掛けた鞄を肩に背負いこんで教室をてると、帰る準備も整え終わったのかとてとてーと梓も小動物さながらついて来る。蓮時と愛は掃除当番の後なんだつたか、用事があるとかで少し遅れるとの事だつたのでとりあえず梓と二人で行くことになつた。

きた？」

「はい、勿論ばつちり持つてきますよー」

ふわふわと微笑みをみせながら梓は鞄からひょこつと用紙を見せた。申請書を書く時も例の如く梓が落書きしたがつて大変だった。結局ルーズリーフを与えてやることで事なきを得たが、生徒会室の前まではちょっと距離があつて気持ちを落ち着けようとしたんだけれど、これは少し緊張するな流石に。

「そういえば梓は生徒会長どんな人か知つてゐるのか？」

闇をもつたよ？」

梓から聞いたところ生徒会長は女子。容姿もよけりや秀才で性格もいいらしい。才色兼備というわけだ。さぞモテるんだろうからそ

の美貌を是非とも拝見したいところだ。まあ今から行くんだけれど。梓と雑談しながら生徒会室まで到着するのにさほど時間はかからなかつた。

緊張で軽く震える手でいざノックしてみると中からは静かな声で返答があつた。

「どうぞ」と言つた本人は生徒会長かはわかりかねるけれど、どこか透き通つた綺麗な声だつた。

「失礼します」

生徒会室の中は四角く机を並べて会議出来るように配置していた。本棚にある大量の資料は卒業生の軌跡や会議などで使つたりする資料などで埋め尽くされている。

「えつと、一年生ね。何か用かしら」

そういうて四角く間取られた机の一角で資料を見ていたのか何枚か並べていた。彼女がふわっと顔を上げた瞬間、どこか胸の奥が反応した気がした。そして彼女も俺の顔を見た瞬間驚いたような、微笑んだようなそんな表情のいなつた気がした。ただの勘違いで思い上がりなんだろうけれど。

長めの髪を片手でさつと整え微笑して首を傾げている。パツチリした目で凄く可愛いらしい顔は男女問わずこの姿にときめいてしまうのではと思つた。

セーラー服の上にベージュ系カーディガンを着ていてそれがとても良く似合つている。

そしてセーラー服やカーディガンを着ていてもわかるくらい胸が大きい。もう、たゆんたゆんだ。梓も愛もわりとあるほうだと思つていたけれど。とか考えてたら頭の中を覗いたかのように梓が小突いてきた。なんだお前はエスパーか。

だが生徒会室のパイプ椅子に座つている彼女は天使のようないい角可愛い。

「えつと、今日は部活動の申請書を持ってきました」

「ん、てことは新しい部活動を認定してもらつ為にきたのね?」

「はい」

彼女のそばまで梓と歩いていき、作成した申請書を渡す。彼女は受け取った紙をゆっくり読んでくれている。その時間は妙に長く感じてしまった。

「雨姫くん、私なんだか緊張しちゃって。大丈夫かなあ」

梓は俺に小声で耳打ちして心配そうに見つめている。

ふわふわした雰囲気は相変わらず。頭撫でてやりたい衝動に負けてうつかり撫でてしまった。

「はうつつ？」

目を見開いてびっくりしていたけれど安心したのか目を細めてありがとうと声には出さず口を動かした。

「えっと、じゃあ仮に部長さんはー…どっちなのかな?」

これは既にハンバーガー屋での雑談で決まったことである。色音部の部長は雛墨梓だ。

「一応、わ…私はです」

弱々しく手を擧げる。なあ、其処までビビることないと思つんだけれど。でもまあやつぱり生徒会つてお堅いイメージ確かに強いしな…。

「名前はー…雛墨さんね。実は私は会長じゃないの。一年生で副生徒会長をしてる、水無月と申します」

水無月 秋乃と名乗った一つ上の美少女は終始落ち着いた雰囲気で、此方を安心感で包み込んでくれる。それでいて何故か懐かしく感じるそんな空氣感だ。

「あのね、とりあえず部員は五人からでないと受理されないみたい。それに顧問の先生も必要みたいだね」

今集まっている部員は4人、顧問の先生にはまだ相談していない。やはりダメだったか。流石にスルスルと都合よくは進まない。

「でも顧問の先生はもしかしたら部活していない先生も結構いるから、大丈夫かもしれないけれど…どうかしら、難しいかもしないわね」

梓はほんのり泣きそうな瞳を此方へ向けてくる。その瞳にはどんな意味を込められているか、伝わった気がした。任せろ、と自信満々には言えないけど頑張るから、そんな顔すんなよ。

「じゃあ、部員をもう一人、あと顧問の先生を見つければ部活動は正式に認定されるって事でいいんですね？」

「そうね、最低でもその条件が揃えば恐らくは受理されると思つわよ」

活動内容とか色々審査されると思つよと咳けば困つたように水無月さんは静かに微笑んだ。

「いつそこの際認定されなくとも勝手にやっちゃんかとか考えてしまつたけれどそもそもいくまい。なんとかなるならなんとかしたい。

「んんー…そこは水無月さんのお力添えでなんとかなりませんかね？」

「えつ、私？」

「部室となる現在使つてない部屋とか知つてたら教えていただきたいし、顧問になつてくれそうな先生も紹介してくれたら凄く助かります」

「うーん…後輩の力になるのはおかではないのだけれど…。わかつたわ、一応探してみるわ

「ほ、本当ですか！？」

「余り過度に期待したりしないでね？」

水無月さんがそうふわり咳けば微笑んで首を傾げている。そんな彼女の姿は粒子レベルでキラキラしてた。なんの変哲もないただの教室でパイプ椅子に座つて微笑んだだけなのに。思わず告白してしまいそうになるくらい絵になつていた。

「友達にも聞いてみるよ。えつ…と、色彩音楽部。部員集まるといいわね」

「そこままでしてもらひちゃつていいんですか？」

「いいのよ。古音、雨姫君」

名前を呼ばれた時に何かこう、意味ありげな違和感を感じたのは

やはり氣のせいだらうか。

でも見ず知らずの一年生に異彩を放つ部活に対して此処までして  
もらえるとは思わなかつた。後日お礼をしにまた来よう。決して水  
無月さんをキュートな姿を見て眼福にあやかる為ではないからな。  
「それでは今日はこれで失礼します」

「水無月先輩、ありがとうございます。本当に助かりましたあ  
気付けばほつと胸を撫で下ろす梓の姿があつた。安心感で表情も  
和らいで、どことなく嬉しそうだ。

そうして笑顔で手を振る水無月さんを背に梓と生徒会室を後にし  
た。

まあこの時の俺は、数日後に旧校舎の一室の部室を頂いた上に顧  
問の先生がいきなり登場することは知らない。

そして、色音部の部員名簿に「水無月秋乃」という名前が追加さ  
れていることも。

\* 1・6色　山吹の名簿（後書き）

お名前を書かせて頂いたボカラロードの歌詞。皆さんとえい。さんにはネットを通じて名前と楽曲の引用許可を頂けました。ここ改めて御礼申し上げます。

どちらもすゝく胸に染み込むメロと歌で、大好きです。毎日聞いてます。

これからまたに登場させたいと思つております。

## \* 2・1色 紅梅ストリングス

生徒会に部活動の申請をしたあの日から数日後、学校へ登校すると色音は正式に部活動認定されていて、旧校舎にある空き部屋を部室として使用することになっていた。

そして現在同日放課後、水無月さんに呼び出されて今は立入禁止となっている旧校舎の屋上へと繋がる階段を上がり、入り口のドア付近に一人つきりという状況だ。

「えーっと、水無月さん。聞きたいことが山ほどありますが、まずはありがとうございます…で、いいんですよね？」

「べ、別に古音君の為に私が入部して規定人数揃えたんじゃないんだからねっ」

友達探したけれど見つからなくて、それで何となく私にも責任もあるなあって思つたし、ちょっと楽しそうだし…と、語尾にいけばいくほど声量が下がつていったので最後らへんは何を言つているのかあんまり聞き取れずに入った。「ごめん水無月さん。けど可愛い。」「でもでも、私勝手に入部する形になつかけたけれど迷惑じやなかつた?なんだかごめんね」

「いや、とんでもないです。大歓迎ですけど、本当に良かつたんですけど?責任とか感じること、全然ありませんよ」

そう言つと水無月さんは少し目を逸らした。といつか一瞬どことなく少し寂しげな雰囲気を感じたのは勘違いだろうか。

「申請書見て楽しそうだなって思つたのは本当なの。だから入部を決めたんだよ。良かつたら古音君も他の皆さんも仲良くしてくれる」と嬉しいな

そんなの当然だ。こちらから土下座してお願いしたいくらいだ。

生徒会に訪問したあの日の後、友人に聞いたら生徒会副会長、水無月秋乃さんはやはり有名だった。可愛さが半端じやないからな。けれどそれだけじゃなくて家柄も裕福らしく、家系が代々神主をやつ

ていて、大きな家に住んでいるらしい。その水無月さんと部活と一緒にやるという旨をクラスの友人達に伝えたところ半狂乱になつたことから学年問わず人気らしい。

「それなら、改めて宜しくお願ひします水無月さん」  
右手を差し出し握手を求めると彼女も笑顔で握ってくれた。暖かかつた。

「私が一年生だからって別に氣負いしなくてもいいからね？・宜しく古音君

そう言つと可能な限り瞳といつファインダーを通して余すことなく水無月さんの姿を脳内保存しておきたくなるような微笑みを浮かべて首を傾げていた。勿論既に保存済み。

「さ、それじゃあさつそく部室にこいつか。片付けとか配置とか色々やりなきやね」

ぐるりと振り返れば綺麗な髪からふわっとい香りがした。そうして階段を軽やかに降りていく彼女の姿はやつぱりどことなく懐かしいような、愛おしいような…兎に角一枚の絵にしたくなつた。

「あつ、そうだ。…」めんやつぱりなんでもない。でも君には私のこと、出来れば名前で呼んで欲しいな

階段を数段降りた所で俺を見上げながらそつと今度はゆっくり降りていった。

彼女の言葉には深い意味が込められている気がした。彼女が言いかけて言えなかつた言葉の意味を考えてみたけれど、俺の足りない頭では全くわからなかつた。

そして生徒会で初めて出会つた時から感じる些細な違和感は未だに胸のどこかに引っかかつたままだつた。

ゆっくり降りしていく彼女を眺めていたら「ほら早く、部室でみんな待ってるよ。一緒にいこう」と声をかけられたので思考するのを一旦止め、一緒に部室へと歩を進めた。

放課後、屋上の入り口から歩いて数分。今は我が色音の部室だ。中々広くて、最初入ったときにはよくこんな部屋借りたなと思つたくらいだ。秋乃さんすげえです。

部室にはもうみんな集まっていた。真ん中に机を一つ並べて簡易テーブルを作つてこちらを見つめている。

「此方の女性が5人目のメンバーの水無月秋乃先輩 この部室も秋乃さんが用意してくれたんだ」

梓も愛も手を取り合って喜んでいる。蓮時もちらりと此方に視線を向ければ無邪気に微笑んでいた。

「え？ 初めまして、水無月秒乃と申します。急な入部となつてしまつたけれど、皆さん仲良くなつて下さい」

「じゃあさじやあせ、みんな血口紹介しようつよ。折角だからせつ」  
秋刀さんかへ「」とお辞儀をすると小さく拍手が起きた

愛が設置された机をノンノと西弾で呟くと上から笑顔を振りまき提案する。それは良い。是非ともやれ。

中学の時からベース弾いてまして、色々ではベースを担当したいな  
あと思つてはいる所存です、はい

みんな「おおー…」と声を洶らした。そうか、眞愛がずっとベース弾いてたの知らないんだつけか。

「じゃあ時計回りで次は俺だな。名前は櫛枝蓮時。（きしだれんじ）中学の時はバスケをしていた。えーっと、ドラマセットが家にあって、叩いてみた

「ハマ」でしまってから密かにエラムを練習してた。色んなエラムを担当したい所存です」

く……完璧だな」いつしかも愛の所存がふせてきたし笑いで  
もいけるつてか。

「櫛枝君、ドラマセシトもつてこられるの？」

梓も興味津々に聞いている。確かにドラムセットは吹奏楽から借

りる訳にはいかないしな。

「まあ持つてくるしかないだろ? な。もう自分のドラムだし構わないよ」

かなり助かる。運ぶ際は手伝わねば。結構運ぶの大変なんだよドラムセット。姫神ロックフェスの裏方手伝いで何往復もしたのを思い出し、何故だか身体の筋肉が痛くなり俺は苦笑いした。

あ、蓮時の次は俺だ。自己紹介つてのはいつやつても慣れない。妙にくすぐったい気持ちになる。恥ずかしくてあんまり好きじゃない。

「じゃあ次は俺か。古音雨姫です。ギター担当したい所存です。えーと…始めたのは中学の時に、とある音楽に触れてから影響されたのがきっかけかな」

「え、古音君ってギターやってたの?」

身を乗り出してきた秋乃さん。俺がギターやってたのがそんなに意外でしたか。でもその食いつきには嬉しさを覚えた。

「そ、うなんだあ。古音君が激しくギター弾いてるといじ早く見てみた  
いな」

秋乃さんに見られると若干恥ずかしい。弾いてる時は無心、夢中状態だけれどなんとなく恥ずかしい。実際にそうなつたら恐らくぐだぐだになりそうです。

因みに使っているギターは臘脂（黒みがかつた赤色）色の木目調レスポールと木目のテレキャスターの一本だ。中学校時代に学校に内緒で沢山バイトして自分で買った大切なギターだ。

実を言うと本当はもう一本ある。これも臘脂色だが、レスポールと違つて赤や黒など虎の目状になつていてセミアコだ。

今住んでる所の近所の兄さんにロックのなんたるかを教えてもらつた時に譲つてもらつたものだ。大切にしてる為、普段は手入れだけしてあんまり弾かない。部屋の中のハードケースに入つてている。

「じゃあ次は私だね。雨姫君の次かあ、部長とか柄じゃないしなんだか緊張しちゃうな。私は離墨梓と申します。楽器は全然できない

けれど、なにかやれることがあるなら是非やりたいです。えっと…あと、私は絵を描くことが大好きです。水墨、油絵、抽象画や絵画を描くことが生きがいと言つか、私つてゆう存在を自分で出来る唯一の表現方法だと思つています。この教室で小さなアトリエを作れる目処が立つて本当に嬉しいです…。隣で皆が音楽を奏でて、それを私は絵で表現したい。音楽と色でスタンダードな表現の一つ、いや一つ上の表現が出来ると思うんだよ。えへへ、照れくさいんだけど、これから皆宜しくね。楽しく過ごしてここうね」

ちよつと驚いた。梓がこんな風に考えててくれたなんて。あまり心中は聞けたり見えたりするものじゃないから、初めて知つた。俺は俺で梓と部活を作ろうと決めた日から様々なことを考へりした。

同じ様に梓は梓で沢山の想いを馳せて、沢山色々の事を考へていたんだな。すごく心に響く話だった。どうしよう、まだ胸がドキドキしている。隣でちよこんつと座つてふわり微笑んでいる梓に俺の激しく脈打つ心臓の音が聞こえてしまつてないか、少し心配になつてしまつた。

「最後は私ね？一年生の水無月秋乃です。私のいきなりの登場に戸惑つたかしら。ごめんね。けどこの部活に魅了されて、一緒に活動したくて入つたの。本当よ？因みに楽器はピアノとヴァイオリンをやつているわ。家で習い事として母から薦められてから今でもやつてているの。自慢じゃないけれど、コンクールでも受賞したことあるから、色音でも一応少しほは役に立つと思うので宜しくね。あと、絵も描いたりするのは私も好きだから梓ちゃん、是非教えてね？一緒に素敵な絵画を描きましょう。こんなのですが宜しくお願ひします」

隣で梓がうんうんと反応し、嬉しそうに此方を見て何か訴えている。わかつてゐるよ、良かつたなと頭を撫でると手を細めて微笑んでいた。

つてか、え？ピアノ？ヴァイオリン？秋乃さんはお嬢様なのかな

やつぱり。つてか楽器できたのか。やばい、なんか基本的なレベルが段違いな気がしてきた。こんな部活に在籍していくいいのかな？色々と心配だ…。

ピアノやヴァイオリンが加わるとなると音に厚みが出るシャレンジの幅も広がる。これはかなりでかい。そしてかなり嬉しいポジションだ。秋乃さんには感謝しつぱなしだな。

「これでひとしきり自己紹介は終わつたな。なんかぐつとやる気でできちゃつたわ」

「あたしもだよあたしもー溢れ出るあたしのやる気はもう止まりませんぞ雨姫さん」

白石紹介が終わると俺らはゆっくり田舎を合わせ、ずっと思つていたであろう皆の意思が一つに纏まる。

「とりあえずまづこの部屋片付けない？」

誰かが言つた言葉に全員が激しく同意する。つてかやつぱり皆同じこと思つていたっぽい。結構味あるよねとか渋いよねとか聞こえるけれど無理がないか？意味不な像とか置物があるんだよな。このままじゃまともに機材や画材や休む場所を作れないからな。今日は全員で掃除と片づけだ。運び込まれた入らない物があるからそれらを寄せればかなり片付くな。

それから全員で時間をかけて部室を片付けた。途中で脱線も結構あつたけど皆でやると楽しくてすぐ捲つた。

段々と形になつていいく部室にそれぞれの想いを投影させ、片付けが終わる頃には明日何を持ち込もうかなんて笑いながら話した。何にもない殺風景な教室にはもう既に俺らの学校生活の要が詰まつていた。

さて、明日は各自楽器や画材を慌ただしく持ち込むことになりそうだな。俺はギターとアンプ、それにギターの設備備品とかエフェクターも持つてこなきやな。うん、明日も忙しくて充実感に心を躍らせる事になりそうだ。

五人の音と色が絶妙に重なりあつ田はそう遠くじやなさそうだな。



## \* 2・2色 白縁ルーズリーフ

太陽がいつもと変わらない方向から昇り、街を照らし込む優しい光は今日も変わらずやつてきてくれた。

昨晩は学校に持つて行く為の機材とギターを見繕つて玄関に用意した。前の日の内にやつておかないと当日でんやわんやになつてしまふからな。

あと早めに出ないと重くて間に合わなくなりそうだし。

楽器を持っていく準備はとても楽しくて、遠足前の子供みたいなテンションになつていたと思う。だつてなかなか寝られなかつたし。軽く寝不足気味だつたけれど前の晩に弁当も作つたし、今朝サー ボマグに梅昆布茶も入れて準備が済んだし、いい時間になつてきたからそろそろ学校へ向かうとする。

玄関に置いてあつたギターケースを背負いこむと、くるりと振り返つて誰も居ない部屋に「行つてきます」と言ひ。これは身に染み込んだ習慣なんだろうな。

少し錆びた匂いのする階段を降りる。いつものよつこ iPodを操作し終わるとポケットに入れ、ヘッドフォンを装着し、音楽を流す。朝は低血圧のせいか、酷く眠いけれどこの瞬間は結構お気に入りの瞬間だ。

iPodから流れる音楽を楽しみながら歩いているといつつかのコンビニで梓がいた。今日は話しかけてみようか。

ヘッドフォンを首にかけて中に入るコンビニの入店音が流れる。憧れの瞬間にちょっと胸が熱くなつた。梓はパックの飲み物とサラダが綺麗に陳列された棚の前に立つていた。

「よつ、おはよう梓」

「うひやあつ、ああびっくりした…雨姫君、驚きましたよお、もう。おはよう御座います」

ふわっと振り返るとゆるくかかつたパーマの髪と、女の子特有のいい匂いが舞い踊る。朝からちょっと幸せな気持ちになる。

「あ、雨姫君早速ギター持つてきてるね。うん、なんか格好いいなあ」「

俺の背中に背負いこんでいるギターに気が付けばはあと微笑んで、嬉しそうに側にくる。

「おおー…」と隠しながらケースをさわったりして、やつぱり小動物みたいで可愛い。

「昨日帰つてから早速準備したんだわ。もう心躍る思いで待ちきれなかつたんだよね」

早く弾きたい。早く部室を整備したい。早く梓に絵を教えてもらつて部室を彩りたい。そんな気持ち。すごく充実した良い感じ。

「もしかして雨姫君昨日ワクワクして寝れなかつたんじゃないですか？」

口元を抑えてこぢらを見つめてくる。ああその通りです図星ですよと言つと「えへへ、やつぱりね」と笑つてみせた。う、見透かされたようでなんか恥ずかしい。

「いいからそれは置いといて、梓は何買ひにきたの？」

内心この朝コンビニイベントに心躍る気持ちだつたりして。しかも女の子と一緒に一人でだなんて。そんなちょっとドキドキする気持ちを隠すように問ひ掛けた。

「あ、今日はサラダ食べたいなーって。ついでに飲み物も買ひにきました」

「もしかして悩んでたりする?」

「よくわかりましたね、実はこの和風サラダと、ローンが入つたこのサラダで悩んでたんですよ」

ちらりとこちらに見せた一つのサラダはみずみずしくシャキッとしてそうで美味しそうだと印象を受けた。

「俺ならそうだな、和風好きだし和風サラダかな」

「和風サラダですか、和風サラダも美味しいですー…」

でも「一郎が…と名残惜しそうに一郎のサラダを眺める梓に、「そろそろ選ばないと時間がさ、ほら」とさつ氣なく唆す。

「あー、本当だ。じゃあ私はこれにします」

コンビニの時計を見ればまだ若干余裕はあるけどぼちぼちいい時間  
ということに気付いたのかサラダを手にとり、近くにあつたパック  
のミルクティーを持つてレジへ向かっていった。俺もなにか買った  
い衝動を抑えて梓の会計を待つ。

つて慌てて口元を抑えていたら梓に見られてた。くすつと微笑む梓を見てつられて笑ってしまった。恥ずかしいけれどなんか、いいなあ。これ青春っぽい。

程無くして「ンヒ」を出しながら、学校へと向かって桟と歩きながら、僕になる事を聞いてみた。

「綺麗カラダはどうしたの?」

「サテタですか?」これにしました。

かさごと二三ヒキの袋は手を穿て込んで取り出したサニタリーベルをよく見てみた。

「えええっ、今更どうカラダ!?」

少しは期待したものだが見事に期待通りだつ

少しは期待したものが見事に期待通りだったのとちょっと大きい声で突っ込んでしまった。朝の登校して同じ制服の人達や違う学校の三佳がこちらをちらつと見ていた。どうしたんだ。

でもまた全然違うの選んじゃつたなこの娘。何故一択問題なのに

堪えきれず吹き出す。笑いが止まらない、ツボに入ってしまったみたいだ。そんな俺をみて「なんでそんなに笑ってるんですかあー」とあわあわしながら次第に梓も笑いだし、腹筋がちょっと痛くなつたくらいにして学校へと足を進めたのだった。

次第に集まる生徒。ホームルームを終え、始まる授業。眠くなる春の暖かな陽気の中各教室では様々な授業が展開されていた。

机に肘をつき、眠氣と格闘すること数時間。待ち焦がれた放課後はあっさりやつてきた。何か楽しみにしていると流れる時間が早く感じる。相対性理論に通ずるんじゃないとか考えてたら梓、愛、蓮時がそろそろと俺の机までやってきた。

「古音春の陽」では、「くにじてね」としか  
讀まないが、「くにじてね」と「くにじてね」とは、

「雨姫。早くしないと置いてっちゃうからねー」

机に突つ伏して いる俺のほっぺたを愛の細く伸びた綺麗な指でぶ  
につと突つづいて いる。「うりうり」なんて言いながらどんだけ笑  
顔なんだよ。そんなに突つづいてほっぺたの形が変わっちゃまつたら  
どうすんだ。

そしてその愛の後ろで微笑ましそうに見てるんじゃない蓮時、い

「ええい、やめいやめい。愛、分かつたつて。準備は出来ているから、もう行こっ」

机の横に掛けてある鞄を肩に背負い、ギターケースと他の機材は教室の後ろの方に置いていたので取りに行く。

た。

因みに愛もベースを大事そうに背負っている。俺が昨日帰りに渡したからなんだけど、その日はなんか愛の様子おかしかったのはちよつと気になつたな。妙にソワソワというかなんというか。落ち着きがなかつた印象だつた。

梓も大きな袋を抱えている。きっと昨日の夜一命懸け詰め込んだんだろうな。悩みながら。

なんでもない日常会話を繰り広げ、部屋までのリノリウムの床を四人でゆっくり歩いていく。ギターケースを背中に背負いこんでい

るからか、心無しか周りの好奇の視線が俺達に向いているみたいだつた。まあ大して氣にも止めず部室に着いた。

部室には秋乃さんの姿はなく、どうやら俺らが先だつたみたいだ。

「それぞれが一旦思い思いの場所にギターや機材、画材などを置いた。

「じゃあ、とりあえず座つてミーティングつてことにしますか」梓がそう声を掛ければ片付けを一旦止めてみんな集まり、先日とはまた違う場所に展開されていた一いつの机で一つのテーブルとしていた机に寄つ掛かり、椅子に腰掛ける。

「ねえねえあずあず、これからどうしようか？」

愛が落ち着きなく椅子をガタンガタンと傾けながら梓を見つめている。確かに、まだ何をするとか決めてなかつたな。愛に倣つて梓に視線を送る。

「そうですね、ここは部長として私が指揮をとらないとですよね」そう呟けばどこかの会社のお偉いさんが重大なことを話すような雰囲気でテーブルに肘を着いた。

「片付けをしましょう」

ほぼ同時。梓とここには居ない秋乃さんを除く三人が活動停止し、頭から机にダイブした。あーあ、テーブルばらばら。つてか…痛い。普通に痛い。

「あずあず、それさつきまで私達やつてたよ?」

「あつうー…ですよねー」

力無くテーブルの上に突つ伏す。そして少し涙ぐんだ瞳でこちらを見つめている。そんな目でみるな、俺だつてなんにも考えてないんだぞ。

仕方なく何か適当でもいいから提案でもするかと助け舟をだそとした時、扉が開く音がした。

「遅れてごめんねー。生徒会の仕事してました」

クリーム色のカーディガンをセーラー服の上に羽織つた麗しい秋乃さん登場。今日は前髪を一つのヘアピンで止めてて、いつもと少しだけ雰囲気が変わつていて。ああすゞく可愛い。

秋乃さんは申し訳なさげに頭を下げつつ、壁際に置いてあるギターケースやベースを見て、「おおっ」と声を出して田を輝かせていた。

「かつこいいなあ……楽器があるだけで、うん。部室っぽい雰囲気になるもんだね」

そう呟けば秋乃さんは空いていた椅子に腰を降ろした。「で、私ね。部室入つてからずっと気になつてて聞こうと思つてた事があるんだけど」

何だらう。首を僅かに傾げつつ秋乃さんに視線を送る。

「コレ、は一体何：かな？」

秋乃さんは困つたように笑いながら机に突つ伏して動かなくなつて部室の置物となつた梓の頭を撫でてる。

「すまないが雛墨は今、頭がショート中なんだ。これからやる事を考え過ぎて動かなくなつたみたいだ」

な、古音。とこちらに視線を送つてくる蓮時。なんだよ、その件に関しては俺のせいじゃないだろう。

そんな蓮時の視線に軽く憤慨していたのだけれど、少し心配になつて梓に声をかけるべきか悩んで「大丈夫か?」と声をかけたら「うん……私は大丈夫だよえへへ」と力無く微笑んでいた。いやいや、気にしそう。そんなになるまで考えなくともよかつたのに。

「じゃあさ、梓ちゃんも画材持つてきてみたまうだしさ。旗とかに色音つてでつかく書いてみない?みんなでさ。この部屋に飾ろうよ」秋乃さんが提案したものすごく魅力的なその内容に、素直に感嘆した。

そして梓のほうをちらつとみれば、爛々と田を輝かせ息を吹き返していた。あ、おかえり梓。

「わ、私、画材ある程度あります。もつてきます。立派な旗、皆

で作りましょ「う

早速つと言ひ残せば梓は今まで地道に持つてきていいた部屋の片隅にある画材置き場に行く。活き活きしてゐるな。

「とりあえず一日じや出来ませんよね。今日は意見を出し合つてしますイメージを固めましょつか」

テーブルにルーズリーフを広げると全員様々なデザインを考案し、この日の内にイメージは固まつた。まあ途中で落書き大会になつたのは最早恒例と言つても良さそうだな。

後は制作に入るだけだ。細かい所の指示は梓がやってくれるみたいだし、凄く楽しみだな。好きなバンドのライブDVDを見てても、バンドの後ろにある旗に憧れを抱いていたから、嬉しい。

それから完成まで要した時間は五日間。

かなり大きい旗を作成したので、描くのに苦労した。梓が提示した手順を守つた結果、五日間と早めの完成となつたのだ。

中心には墨で色音と大きく、そして渋く描かれている。これに使用した大きな筆も自分達で作成した。勿論テレビなどで使うあんな立派な物ではない。即席らしく決して格好の良いフォルムではないけれど、しつかり墨を吸つて力強く描けた。皆で作った初めてのものだ。

その字の周りには様々な色を使って幾何学的な模様や綺麗な曲線で植物をイメージしたデザインが施されている。色の使い方が絶妙で、型にはまらないような梓のセンスに驚いた。なんとなくわかつてはいたんだけれど、やっぱり梓はすごかつた。身をもつて実感した。

ハッキリ言つてかなり御洒落に仕上がつてゐる。とても深く、壮大が伝わる。自分も携わつたから褒めちぎるのは恥ずかしいけれど、これは良い。大満足。

これは愛の提案だつたんだけれど、旗の右下にメンバー全員の手形がランダムに雑に在る。これも皆で考えて、それぞれ皆のイメ

ジ色を様々な塗料の色を綺麗に調合して作り、珍しい色を使って手形を付けた。なんか嬉しくなった。自分達の作品だよって、サインをしたみたいな感覚に少しきすぐつたくなつた。

俺らのバンドの練習場所に予定していた後ろの壁にでかでかと掲げられた色音の旗は一気に部屋の雰囲気をとてもいいものに変えてくれて、この旗をバックに演奏するのを想像しただけで自然と笑みが零れてしまった。

「完成したねっ！」

そう呟く梓の顔には塗料が付いてる。拭つてあげると梓は恥ずかしそうに笑い、掲げられた色音の旗を眺めれば本当に嬉しそうに微笑んだ。

もう散つてしまつたはずの桜の花びらが舞つた気がした。そして梓が描いたその模様を見ていると心がざわついた。最初は氣のせいだと思つたんだけれどどうも氣のせいではないみたいだ…。

耳というよりか脳に直接、微かに流れる優しい音楽に戸惑つたけれど、今は頭に流れるその音楽を楽しみながら完成した作品を仲間と一緒に喜びに浸るうつと思つ。

## \* 2・3色 群青コレクション

例えば。

朝日が覚めたら全く別の場所にいた、とか。いつもと同じように部屋の扉を開けた先は違う風景が広がる場所だった、とか。

一度目を閉じ、次に目を開けたら地球の裏側に居た、とか。

そういう時の気持ちやリアクションはそういうった体験をしないとわからしかねるものだらうけれど。

どうか、完全にこの例え話はオカルトだし、そういうトンチキな体験をした人なんていないと思うけれど。

でも俺は今、擬似的でもそんな経験をする事となつていて。大袈裟かなと思つたけど未だに信じられない気持ちだ。

先日の活動ではメンバーで作った色音の旗を部室の一角に飾つた。それからまた何日か使って蓮時のドラムセットを運び出して設置し、その近くにスタンドを持ってきてギターとベースを立てていて。俺と愛が使うアンプは俺のアパートにあつた30Wのアンプと、もう一回り小さいアンプを持ってきていた。

なのに。今日、放課後の部室には有名ブランドのアンプヘッドとキヤビネットが三台ずつ。その近くには新品のキーボードが設置されている。その横に秋乃さんは居た。Hレキヴィアイオリンを手に携えて。

その姿は凜とした花の如く、されど儂げに微笑んでいる。今からコンサートが始まるのではと思わず感じてしまう雰囲気と静けさに、声を出すのを忘れていた。その姿に見蕩れてしまつていた。

「あ…秋、乃さん？」

動搖しそぎたのか、声が裏がえつてしまつた。気が付けば同じよう後にろで二人も固まつていた。

出来る限り思念を幾度も反芻した。なぜ、いつなつたのか。

ああ。思えば一昨日…

…

### 一日前の放課後

「あ、蓮時。携帯なつてるよ」

今日一日のつまらなくて怠い授業が終わり、放課後俺の机で少しだべつていた時。ふと鳴った携帯の着信音は自分が設定して聞き慣れたメロディーのそれとは違った。

蓮時は胸ポケットから携帯を取り出しディスプレイを確認すると微笑し、電話を受けた。

「もしもし。…うん。うん。あ、もう着いたんだ?…うん。わかつた、今行く。ありがとうな」

携帯を閉じると蓮時はスッと立ち上がり、教室の窓から外を眺めている。窓からの景色は綺麗な緑や和かな風景が広がっている。蓮時は何を眺めていたのかね。

「古音、ちょっと手伝ってくれるか?俺のドラムが学校までやつてきたみたいだ」

「なんですか?蓮時のドラムがやつてきたってば、えーと…ん?」

「姉さんが今日仕事休みで、頼んだら放課後校門の辺りまで持つてきてくれるって」

それで今着いたらしくて駆け出しありで走ってしまったのでついて行くことに。

「優しい姉さんだな。正直びっくりして運ぶか考えてたけれど思い付かなかつたから助かつたわ」

蓮時の後を追い、隣を歩く。ドラムは重いからひょいと苦労しそ

うだなと思つていた矢先の出来事に感嘆する。蓮時のお姉さん、ありがとう本当に助かつた。

「蓮時の姉さんってどんな人？」

「んんー…なんだろう。まあ元気だな。テンション的なあれば高いほうだと思う」

蓮時も整つた顔立ちをしてるし、美人かもしない。眼福に肖ろうと、俄然脚が軽くなる。早く行こうと蓮時を急かしつつ玄関へと向かつた。

上履きから外靴へと取り替え、校門へ向かうとそこにはパールホワイトの乗用車が横付けされていた。

「おーい蓮時、遅いよもーー」

車に乗り掛かりながら左手を挙げた女性がお姉さんだろう。

初めて見た蓮時のお姉さんは整つた顔立ちをしている。U.KロックプリントのTシャツと、程良いダメージジーンズが本当に格好良く、シンプルなファッショニにも細かなお洒落感があり、とても綺麗なお姉さんだった。

何となく悔しくなつたから蓮時の背中をドラムステイックで突つついてやつた位だ。

「あれ、蓮時。もしかしながら彼が古音君なのかな？」

「そうだよ。色音つて部活を作つた、同じクラスの友人だ」

犬みたいだなあとほんわか思つてゐるといつの間にか俺の顔をお姉さんが覗き込んでいた。

「初めまして、蓮時の姉の琴美だよ。櫛枝琴美。宜しくなー少年つ」勢い良く俺の肩をばしばしと叩き、豪快に笑いながら宜しくと言つてゐる。うん、本當だ明るいしすごく元気だな。

「じゃあ姉さん、あとは一旦降ろすからもう大丈夫だよ。ありがと

う

「そーかい?なんなら姉ちゃんが中まで運んじやうよーっ?」

につこにこ顔でそう提案するも蓮時から丁重に断られてショボー

ンの琴美さん。…姉？実は妹？なんにしろ可愛いなあ琴美さん。

「じゃあ私は帰るねー…ではまたな諸君」

小型犬みたいな琴美さんはドラムセットを校門の近くにおひしくて、

帰ってしまった。

初見だったけどとても雰囲気が柔らかく、そのなんとも言えない優しい空気に癒された。また機会があれば話してみたいな、と蓮時とドラムセットを部室へと運び出しながら俺は、知らない内に微笑んで、思っていた。

「古音、そのスネアはそこに置いてくれるか？もうテープでマークリングしてるから、それに合わせて置いてくれ」

俺らはあれから、携帯を使ってみんなに連絡をとった。少し校門で待っていると全員来てくれたので、部室まで余り往復しなくて済んだ。

距離が距離だったのちよいちよい休みながら、ドラムセットはアパート無事部室へと運び出せたのだった。

今部室では息切れを整え終わったメンバーで、機材と楽器を運搬及びセッティングしている。蓮時のドラムセットを玄関から部室、部室からセッティングと運び出すのにかなり労力を消費した。

運んでいる最中口頃の運動不足もあって節々がギシギシと悲鳴をあげ、肉体がもう酷使するなど訴えかけてくる。いやー…もうちょっと頑張れ。

「つか蓮時、このスネア良くな買えたな。これいつだか楽器屋でみたわ、高いよな」

「まあな、ずっと欲しくて金貯めてたからな。駅前にフレンドールつて楽器屋あるだろ？そこで買ってから、大事にしてる」

蓮時が持ってきたのはかなり良いスネアだった。俺も雑誌とか見てて名前知つてたし。実際に叩いて音を聴かせてもらつたけれどやっぱり良い音だった。心地良く体を突き抜ける打音は強く惹きつける魅力的な音だった。

因みにそのフレンドール楽器屋にはお世話になつてゐる近所の氣のいい兄さんも働いてて、その兄さんがセミニアのギターを譲つてくれたのだった。今も部屋で大事に保管している。

蓮時の指示通りにスネアを設置し、大体運び終わつたので細かなセッティングは任せた。

ちらりと見るとドラムセットを運び出す最中に現れた梓と秋乃さんが美術スペースで配列している。梓も着々と画材揃つて来ているみたいだつた。

梓の美術スペースは、床に汚れてもいいように布が敷いてあつて、製図板のような大きな絵描き台もある。棚には綺麗に画材が並べられ、美術つて感じのスペースになつていた。

「雨姫君雨姫君、どうですか？いい感じだと思いませんか？」

そう嬉しそうに振り返る梓はキラキラと輝いて見えた。自分の好きなことをやれる準備が着々と整つてきている事や、前に会話していた時にちらつと呴いていた事なのだけれど、仲間と同じ時間を共有できるのがすごく嬉しい、とそう言つていた。

「ああ、結構持つてゐるんだな画材。なんか知らない道具とかがいっぱいできょっと見てるだけでテンション上がるよ。今度部室の片付けが落ち着いたら色々教えてな」

勿論だよつと意気込み、任せなさいと言ひながら梓は片付け作業に戻る。秋乃さんはそんな梓の様子を静かに微笑みながら見ていた。ふと視線をこちらへ向ければ首を傾げて微笑んでいる。可愛い。

愛は俺が持つてきたエレキベースを大事そうに見つめていた。なんとなく自分の使つていた楽器を大切そうにされるとくすぐつたくなる。

「ねえ雨姫。このベース本当に借りていいの？」

満開の桜の花弁のような微笑みをこちらに向けてきた。そんなに喜ばれるなら本望だ。

「勿論無期限で貸したげるよ。愛確か新しいベース今度買つんだよな？それでも、もし使いたいなら卒業まででも、大丈夫だから

「えっ？ それはなんだか流石に悪いなあ……」

「ほう。 どうとつ愛も遠慮を覚えたか」

「ちゅう、ば…馬鹿にしないでよ。 雨姫めー…でもでも、ありがとう。 じゃあ借りる…ね？」

チラシと上目使いで見上げる愛。 思わずそのベースあげるよなんて言いそうになつた。

幼馴染だけぢ…うん。 女の子は可愛くなるんだなあ。 昔は男兄弟のように遊んでいたセゲフン！！ これ以上は愛が俺の思考を読んでダブルラリアットをかましかねないので自重する。

「ん。 自由に使っちゃって構わないから」「…」

「えへへ、ありがとつ。 でも、あたしが新しいベース買ひときはちやんと付き合つてね？ 忘れないでよ？ 約束したんだからね？」

絶対だからねと付け足して、お年頃な高校生ならば一瞬で恋に落ちてしまつのような微笑みを浮かべると、大事そつにベースを抱きしめながらドラムの隣辺りで細かな調整や弦高の確認、オクターブチューニングを始めた。 なんだか宝物を扱つよう見えた。

梓や愛、蓮時が一生懸命準備とか調整をしているの眺めていて、ふと自分の調整とか片付けがまったく終わっていないことに気付く。いかんいかん。

早速持つていたエレキギターのレスポールをケースから取り出す。とりあえず傷が付いていないかざつとみて、チューニング用エフェクターと、エフェクターとギターを繋げる為のシールドを袋から取り出して接続端子に差し込む。ついでにオクターブチューニングも、と作業を進めているといつの間にか隣にちょこんとしゃがむ秋乃さんがいた。 気付かなかつた分、気付いた時ちよつと顔が近くでドキドキした。

「わあ… ギター、だよね。 うん、かつこいいなあ」

チューニングもあらかた終わり、持つてきたエフェクターを順番にシールドで繋げながら秋乃さんの少し熱い視線を感じていた。 あまりこうゆうの見た事ないのかもしれないな。

「ねえねえ、それはなにをしているの？」

「べ、別に興味あるわけじゃないんだけどねー、と見事に可愛い仕草にセッティングの手がぴたりと止まってしまった。意外と素直じゃないんだなあ、可愛い。」

「えーっとですね、これエフェクターつていって、このギターの音に効果を付けられる機械をうまく配列してギターに繋げている途中なんです。例えばこのディストーション、オーバードライブってエフェクターは簡単に説明すると音を歪ませたりする効果があります。ロックではかなり必須なエフェクターですね。他にもディレイやコーラスなど空間系と呼ばれるエフェクターもあるんですよ。あとワペダルと。これがそうなんですけど、後で繋いでみますのでその時聴いてみてくださいね」

再び手を動かし、エフェクター用のシールドを接続しながらそう言つと秋乃さんは嬉しそうに頷いていた。

「ほ、本格的なんだね古音君。で、えーっとさ、私はどうじたらいのかな？」

困ったように小首を傾げる秋乃さんは興味深そうにエフェクターを眺めている。秋乃さんは確か自己紹介でピアノとヴァイオリンを昔からやっていたと言つていたので、バンドの音圧とアレンジの幅野が広がるとすごく嬉しくて喜んだのは記憶に新しい。

「秋乃さんは、ピアノとヴァイオリン弾ける、んでしたよね？」

「うん、一応小さな頃から習つてたわね。私の家つて神社の管理とかしてるし結構和風な家なんだけれど私が昔どうしてもと言つて習わせてもらつたの」

なに、神社の管理？神社…神社好きの俺にとって魅力的な言葉が飛んできた。とても気になるし、御茶でも用意して盛大に話を広げたいんだけど、次の機会までおあずけ。近いうち必ず秋乃さんと神社の話をしよう。

「神社つて…じゃなくて、それだけ卓越してそつならキーボードとかヴァイオリンで、バンドしたいですよね。キーボードとかエレキ

ヴァイオリン持つてたりします？

そう聞くと秋さんは思案顔になり、口元に可憐な指をあてている。色っぽい。

「キーボードは何となく解るから用意出来そんなんだけれど、そのエレキ？エレキヴァイオリンって、何なのかな？」

エレキヴァイオリンを取り入れているバンドは洋楽にも邦楽にも現存している。かなり獨特な音楽性になつて、ギターソロとはまた全く違う格好良さと纖細さが生まれる。

「バンドとしてオーケストラ等で使うアコーディオンを使うとなると、どうしても周りの楽器に負けてしまいがちなんですね。いや勿論アコースティック使つてているバンドもいますけど、割り切つてエレキヴァイオリンにしたほうが俺は好みですね」秋さんは必死に俺の言葉を拾つては携帯でメモしているようだ。でもなんといっても機材は高いので無理はしないで欲しいと付け加えた。

「成程…。古音君詳しいね、ビックリしたよ。了解しました」

詳しいといふか音楽好きだったから知識も自然と入つてくるのだ。

沢山聴いたり見たり演つたり読んだり。

秋さんは、「あ、それとね」と続けて質問があるようだつた。

「その、アンプ？つていう機材は、ないともしかしてエレキヴァイオリンは鳴らないの？」

「そうですね。このギターもそんなんですけれど、アンプに繋がないと基本的に音は出ないです。因みに持つてきたのはそこの中ラムの横にあるアンプです。30Wでちょっと物足りないけれど全然問題なく演奏できると思いますよ」

俺もいつか大きい100Wくらいのヘッドアンプとキャビネット欲しいんですけどね、と苦笑いを浮かべた。

「成程…勉強になるなあ。じゃあアンプも必要なのね？大きいとやつぱりいいんだなあ」

途中で小声になり、また思案しながら秋さんは「ありがとう古

音君」と微笑んで机で作ったテーブルに戻つていき、必死に携帯を操作していた。ああ、秋乃さんも色音の事を真剣に考えて、そして真剣に楽しんでるんだなあと横顔を眺めて嬉しい気持ちになつた。

それから各自細かなセッティングをして、その後軽く音出したりお茶飲んだりしてその日の活動に満足してみんなで帰路に着いたのだった。

……  
……  
……  
……

回想終わり。

そして改めて目の前の光景に視線を送る。

そこにはやはり間違いなくキーボードがあり、エレキギア イオリンを持つている秋乃さんがこちらを見ている。30Wのアンプは壁際に綺麗に収納され、そのアンプがあつた所には100Wのキャビネットとヘッドアンプがある。何度も目を擦つても間違いなく、ある。

「あれ？みんな、何で入つてこないの？」

入れなかつた。と言うか入るのを忘れていた。信じられない光景に飛びかける意識をなんとか取り留め、秋乃さんの元へ歩いていく。「あの…秋乃さん、この機材は一体どうしたんです？」

愛と梓は既に興奮気味にアンプの方へ「す、すすすんごーーい」とバタバタ走つていく。いや、うん。そりや凄い。俺だつて本来ならばそちら側だ。大興奮して触りにいくだろう。ただそれより驚愕のほうがまだ上回つっていて無邪気に喜んでいいのか戸惑うのだ。

「ほら、一日前だつたかな？古音君と話したじやない？その時に必要かなー、揃えたほうがいいなあつて」

ふわっと嬉しそうにそう言つと、徐々に不安げな表情に変わつていく。しまつた、俺の顔は今、戸惑い顔だ。女の子を不安げな顔させちゃ、なんか駄目だ。

「わ、私余計な事、しちゃったかな？もしかして、違うもの買つち

やつた……？」

「いや、バッヂリです。バッヂリ過ぎてまだ実感が湧かないんですねが、あの……どうやってこんなに揃えたんですか？」

「えっとね、キーボードは頂きもので、エレキヴィアイオリンは家の人間に話したら用意してくれたんです。アンプも、お父様が楽器屋に深い知り合いがいて、用意しちゃつてくれたんです」

「ええええお父様すげえ。これだけの機材をなんなく揃えるなんて一体何者なんだ？つてか家の者つて。ヤバい、これ秋乃さんの家の事ちょっととつてか、かなり気になる。

何にせよ無理して揃えた訳じゃない事を知つて安息。それにしてもすごいな。こんなのもうちょっとしたライヴハウスじゃないか。それにエレキヴィアイオリンは現物初めて見た。まじまじ見ていると秋乃さんは若干恥ずかしそうに頬を赤らめていた。可愛い。

「使い心地はどうですか？アコースティックヴィアイオリン慣れてると、エレキヴィアイオリンにしたときに弦とか形とか諸々違和感があるといいますし」

「確かにまだちょっと慣れないかなあ。でもなんか新しい楽器使って嬉しいし沢山弾いて馴染ませるよ」

瞬間。ぶわっと綺麗で暖かな桃色の風が勢いよく身体を吹き抜ける感覚がした。

子供が新しい玩具を貰つたような。欲しかった物をプレゼントされた少女のような可憐で純粋な微笑みに、暫く見入つてしまつていた。

その後、エレキヴィアイオリン、ベース、ギターの各自楽器を秋乃さんのアンプに繋げ、試し弾きして楽し過ぎて時間を忘れ、下校時間をとうに過ぎていた事はもうアンプを目の前にした時にまあ分からりきつた事だったのかもしれない。

先日、ところの突然で驚愕の出来事となつたヘッドアンプとキャビネットを秋乃さんが持つてきただ、そのあまりに豪華なアンプを使用して演れる事に夢中になりすぎて時間の流れに気付かずに夜の九時を時計の短針が過ぎ去つた頃。

見回りにきた先生に叱られて、咄で急いで片付けて玄関までヒゲの赤いおっさんよろしく猛ダツシユして走つていると、沸々と笑いが込み上げてきた。青春っぽいなあと呟きながら、周りの仲間と共に激しい高揚感に満ちていた。

すっかり暗くなつた校内には部活に励んでいる生徒達の声はもう既になくて、その時にああ、結構遅くなつちゃつたんだなと実感した。そりや流石に先生も怒るわな。

静かな夜の学校独特の怖さなどは全く眞無で、むしろ俺達は互いに驚かせ合つたりして楽しい気持ちのまま、青春色に染まつたりノリウムの床を駆け抜けた。廊下の窓から流れしていく街の灯りが妙に暖かかつた。

「雨姫君、早くしないと追いつかれちゃうつ」

梓の心配する声が聞こえた。言われなくとも必死に走つているのだけれど距離は開く一方で全然追いつく気配がない。如何せん運動不足が祟つて息切れが激しく、うまく空気を肺に送り込む事が出来ずについた。

「ちょ……まつ……皆なんでこんな時だけこんなに早いんだよ……」

うまく前に足がでてくれなくて縛れてしまつ。背負つてあるレスポールが足を前に出す度に激しく背中を殴打する。つてか重いんだよレスポール自重しろ。

「雨姫ー早く走らないと置いてつけられー」

あはははっと透き通つた声で笑いながら俺に声をかけてきた。つてかなんでベースを背負つても愛は、あんなに早く走ることが出

来るんだろう。身体能力の高い奴なんだなあと関心しながらも、このなんとも刺激的な状況は正直めちゃめちゃ楽しめてしかたなかつた。

この後怒れる先生を振り切り、無事に学校から脱出した俺達は軽く雑談した後、解散した。其々が帰路についた。

夜遅くまで学校にいるとか、そりやつ皆でちょっとだけ悪い事をしてる感がまた、青春っぽさや楽しさを増長させてたんだと思う。非常に楽しくて刺激的な時間だった。

この日寝る前に今日起こつた楽しい出来事をつらつらと思い出してみた。

あまりの事に思わず含み笑いをしてしまった。そして数分余韻に浸っている数分後、布団の暖かみに意識を放棄すると、身体は思いのほか疲れていたらしくあっさり眠りに落ちてしまったのだった。

そんな俺の人生を形成する為に必要な一つの大切な思い出となつた日からまた数日後。

気付けば春はあっさりと通り過ぎ、あんなに綺麗だった桜もひらひらと既に散つてしまっていた。満開に咲いた桜の木があれだけの量なのだから、散つていいく光景もそれはもう凄まじいものだった。目に入る色彩情報の殆どが桜色。ひらりひらりと舞い散る桜は、散りゆく最後まで綺麗だった。この世の光景とは思えない絶景に、寂しいけれどまた来年逢おうなあなんて、桜に心の中で話しかけたりした。

うん、季節は順調に進んで、すっかり初夏だ。

そんな初夏のとある放課後、掃除当番をこなしたのと担任の中野先生に雑用を頼まれたので俺は部活に行くのが少し遅れてしまった。用事をちやつちやと済ませて、足早に部室へと歩を進める。廊下に流れる涼しくて爽やかな空気は、仄かに春の名残を感じさせ、もうすぐ青春の夏なんだなあなんて考えているとあつと/or>う間に部室に着いてしまつていた。

部室のドアを開けると窓から臨める新緑の樹は初夏独特の優しい風を受け、そよそよと揺れている。そんな風景が重なって、部室がいつもよりも鮮やかに感じた。

部室にはやはり既に全員揃つていて、机を合わせただけのテーブルに集まつて座つていた。それぞれの目の前にはメモが書かれた紙があり、テーブルの真ん中にはルーズリーフ一枚置いてある。

そう、今日は皆がそれぞれ演りたい曲を何曲か選んできて、それをルーズリーフにまとめる発表大会を開催するのだ。

「雨姫遅いよー、もう始めちゃうとこだつたよ?」

ふんふんっと擬音が聞こえる気がする程に頬を膨らまして、愛は安堵の表情でわざとらしく腕を組んでいた。向日葵の種を含んだハムスターみたいだな。

愛に倣つて秋乃さんも梓も蓮時も此方を見ればどこか安堵した表情を浮かべていた。

「遅れてごめんな、じゃあ早速リストアップ始めちゃおうか」「端っこに鞄を置きに行ってパタパタと簡易テーブルに小走りして向かう。ちょうど空いていた梓と蓮時の間の席に座る。

色音が出来てからずっと何の曲を演ろうかどんなバンドをコピーショウつかとひたすら悩み続け、ある程度曲を絞ることも辛かつた。バンドを組んで、大好きな音楽が出来ると思うと気持ちが高揚して、どうしても欲張つてしまふのだ。

その悩みと同じくらい、いすればオリジナルをやるつてのもかなり想像して考えて考え尽くしてきた。要するにこれからのが楽しみすぎるつことなんだよな。

「おお、みんなちゃんと書いてきたんだ?」

それぞれの前に置かれた紙を見れば曲名がリストアップされている。

「雨姫君もちゃんと書いてきた?つてかもしかして考えすぎて昨日の夜寝れなかつたりしたりして」

変な所で鋭い梓にすばり凶星を突かれ、少し狼狽える。それを見て「やつぱりねー」と微笑みかける梓は可愛らしいんだけどなんか恥ずかしくなって目線を逸らした。

梓の言つた通り、昨日の夜は家事の諸々を済ました後ひたすら悩み倒していた。オーディオの前に胡坐をかき、大量のCDを周りに壁を思わせる程に積み上げて、「決められない…」と漏らした声は安アパートの部屋に虚しく響いていたのだった。

梓の指摘に昨夜の事を反芻している内に愛が発表大会の流れの舵を取り始めた。

「じゃああたしから、発表しちゃおっかなー」

そう楽しそうに言い出した愛が右手を挙げた。

そんな愛を見て今氣付いたんだけれど、愛は俺が中学の時にあげた黒のゴムでできている細いブレスレットを未だにしていた。まだ持っていたのか、なんてあげた俺がすっかり忘れていた。えーっと確か中学一年の晚秋だったかな、姫神山の麓の祭りに愛と一緒に行つた時に、俺が小物の出店で一つ買つっていて、その頃食べ物の屋台に夢中になつてた愛はお金が無くなつてしまい、「それ欲しい、雨姫、それあたしも欲しいよぉ」と涙目でだだこねてた際に一つ腕から外してあげたんだっけ。そんな事を思い出して懐かしい気持ちになつた。

「ん、ちょっと。なにそんな見つめてんの雨姫。発表しずらいよ」「恥ずかしいよ…、と声を窄めると何故か頬を赤らめて手に持つていた紙を忙しくいじつていた。何となく愛の最近見せ始めたそういういちいち可愛いらしい仕草に気持ちがほこほこした。

「じゃ、じゃあ気を取り直して発表するねっ。私からは厳選して一曲ね。dec0\*27さんの相愛性理論を皆では是非演奏したいです」「きなり名曲がきた。俺自身相愛性理論がもの凄く好きで、よくこの曲を聴きながらギターで合わせてたな。今日選ぼうと思つてリストアップして未だに悩んでた曲。演奏するとしたら秋乃さんのエレキヴィアイオリンがいいパンチになつて壮大な演奏になる。皆の奏

でる綺麗な音色でギター弾く事を忘れちゃつたりしてなあと思つたりしていた。よくやつた愛。

「おお、愛ちゃんの選曲間違いないねえっ、相愛性理論かあ」

梓が興奮した様子でテーブルに乗り出している。その曲ね、動画サイトに投稿されたときから私はもう虜になつちやつててね、リリースされたCD盤はまたアレンジされてて実は結構違つてるんだよね、と珍しく饒舌になつている。音楽の話になるところなるんだろうか。それでねそれでねと更に続ける話にはもう秋乃さんしか聞いていられないのすら気付いていない位夢中になつていた。

「俺はもう大賛成だな。蓮時はどう?」

梓の話を途中まで聞いていたけれど途中から口元に手をやつて思案顔の蓮時に話し掛ける。

「ああ、皆いいならいいんじゃないか?ちょっとどんな曲だつたら曖昧だから帰つたら聴いてみるわ」

蓮時はつづら覚えている位だった。今日発表する楽曲は皆が皆知つてゐる訳ではないのは判りきつていていた事だったからとりあえず中断せずに、真ん中のルーズリーフに愛が相愛性理論と可愛い字で書き込んで、このまま発表会を続けることにした。

「じゃあ次俺だな。BIGMAMAってバンドから、CPXを提案する。俺も水無月先輩のエレキヴァイオリンがあるのはかなりでかいと思うから、ヴァイオリン使つてるバンドから選曲してオリジナル演るときのバンドサウンドにヴァイオリン合わせる感覚養えると思つてや」

BIGMAMAつていうバンドは、蓮時の言つ通りエレキ・ヴァイオリンを採用している邦楽のバンドで、初期メンバーでは男性がエレキヴァイオリンを担当していたが現在はメンバー・チェンジの後に、女性が演奏している。CPXも、演奏者が変わって再録されていて、やはり微妙に変わつていて。初期は激しく、今も激しいのだけれど、どことなく穏やかで優しい。厳密にいうと実は半音違つていて、個的にも最初のミニ・アルバムに収録されていたCPXという曲の完

成度に關しては脱帽していた。再生して最初の一秒でエレキヴィアイオリンのソロ旋律に脳を叩かれ、余りの格好良さにその三秒目で既に惹き込まれてしまう。そのヴァイオリンに続いてギター、ベース、ドラムが同時に激しく奏でる頃にはもう言葉を失い、虜になるのに十秒もいらなかつた。

その旨を蓮時に変わつて俺が皆に伝えた所、「この曲を知つていたのは俺と蓮時と梓のみだつたので、後で秋乃さんと愛に聴かせてあげることにした。そして蓮時はルーズリーフにcpxと追加した。蓮時の字はなんか纖細な字だつた。

「じゃあ私。次発表しちゃおうかな」

秋乃さんが控えめに手を上げるとメモを片手に立ち上がつた。今まで発表した一曲はどちらも秋乃さんのエレキヴィアイオリンを活かす選曲だつたけれど、秋乃さんはどうなのだろう。俺は少し緊張して立つている秋乃さんに視線を送つた。

「私は、その…あんまりバンドとか詳しくなくつて。今まで凄く悩んだんですけれど、テレビというか、音楽専用チャンネルを見てたときにACIDMANってバンドの曲がすごく綺麗で激しくつて。出来るのなら是非、赤橙を演りたいんです」

正直驚いた。秋乃さんがACIDMANを知つていてるなんて。メンバーを見ると皆同じ表情をしていたので皆ACIDMANをきっと知つていて、今同じ気持ちなのだろう。なんとなくクラシックとか上品な音楽を聴いているイメージだつたから意外だつた。

ACIDMANは一曲の中に静と動、生命、宇宙を詰め込んで壮大な音樂性と歌詞性を孕んでいるバンドだ。聴き終わった後は映画を一本見終わつたあの独特な感じになる。

リリースされたCDはほぼ持つてゐるくらい俺も大好きだし、その中で赤橙選曲とゆう選曲がまた渋くて、もう大賛成だつた。

「水無月先輩、ACIDMAN好きなんですね。本当いいですよね、あの独特的雰囲気。あたしも大好きなんです」

嬉しそうに頬を緩ます愛が秋乃さんに視線を送れば「賛成、大賛

成つ」とテーブルに乗り出している。

今思えば中学の時だったかな、俺がACIDMANの曲を初めて聴いたのも赤橙だった。偶然流れたPVに見入った記憶がある。優しく切なさを感じさせるコードを使った進行で、哀愁感が漂う良い雰囲気の曲だつた。そのあまりの完成度にPVを見た後すぐにレコード屋に走って買いに行つたなあ。あれは雨の降りしきり、道路が雨に濡れて熱された雨が噎せ返る匂いを放つ夕方頃だつたか。偶然レコード屋にて出くわした愛に聴かせたら愛も即効ハマつていた。ベースラインも相当に格好良いのでもしかしたらもう愛も弾けるのかもしねえ。

「愛はもしかして赤橙もう弾けたりする?」

「当然ですよ。雨姫に聴かせてもらつてから学校で部活前とかに密かに練習したもん。ウッドベースでだけれどね。今でも大好きだから運指は覚えてるよ」

どや顔して答える愛を見て、赤橙はすぐに合図せられそつだなあと思っていると秋乃さんは真ん中のルーズリーフに書き込んでいく。大人っぽい、習字でも習つっていたのかなと思うくらい綺麗な字だつた。

「じゃあ次は私ね。うー、なんか緊張しますね」

梓が照れくさそうに隣で咳く。梓の隣に居るとなんでか頭を撫でたくなる衝動に駆られる。まあ撫でちゃうんだけれど。

「はうっ。ううー、ありがとう雨姫君」

そのときふと、愛と視線がぶつかる。心なしか愛の表情が愁いでいるように見えた。あまり見ない表情で、少し心がざわついた。

「じゃあ、発表しちゃいます。私はFACTってバンドのact of lifeを是非とも推薦したく思います」

「うおっ、マジですか!?

驚いてそう声を上げたのは蓮時。蓮時もFACTが好きでよく聞いてたんだっけな。

「あのドラマ出来るかなー…いや凄くいい曲だし格好良いに決まってたんだっけな。

「あのドラマ出来るかなー…いや凄くいい曲だし格好良いに決まってたんだっけな。

てるんだけれど、古音は？あれ弾ける？」

戸惑いつつもやる気ありげな雰囲気で俺に問い合わせてくる。その時クンッと弱めだけれど背中のシャツを引っ張られた。振り返れば、梓が小動物よろしく心配そうな表情で此方に視線を送っていた。

「んんー…出来るかなー。でも折角だし演りたいな」

FACT。邦楽のバンドなのだが、日本人離れした演奏と歌唱力。そしてライブ力がものすごい圧倒力。

「でもその曲わからないけど、皆の考えて絞り出した一曲ならどんなに頑張っても私は演りたいな」

秋乃さんは俺と蓮時の会話を聞いた後、演りたいと言った。まだシャツを掴んだままの梓が嬉しそうに微笑んでいる。向日葵のような爽やかな風が吹き抜ける。そんな笑顔を向けられたらどんなに指が痛くなつても演りたくなるだろう。一度聴けばわかるのだけれど激しくもキャッチーなメロディーに身体を激しく動かし、頭を振らずにはいられなくなる。PV等で能面を被つて演奏したりしていて、能面バンドとも呼ばれたりもしている。

「でも」「めんなさい私、そのバンドわからないわ」

あまりロック系の音楽に縁がなかつたらしい秋乃さんはそう呟くと申し訳なさそうに此方に視線を送つた。全然問題ないから、だからそんな顔しないでほしいな。

「今日リストアップした曲はCDに焼くんで心配いりませんよ。皆に配ります」

秋乃さんは安堵したのか「ありがとう、それはすごく助かるわ。優しいのね」と柔軟な微笑みをくれた。秋乃さんに続いて皆がありがとうと言つてくれたのが妙にくすぐつたかった。すごく嬉しかつた。

「じゃあ最後は俺だな」

少し緊張しながらもメモを手に持つて起立する。一斉に注目を浴びて少したじろいだ。

「雨姫は何の曲を提案するのっかなー」

愛、なんか変なプレッシャーをかけるのを止めてくれ。そんな期待に満ちた目をして見つめられると一瞬何を話そうとしたのか解らなくなりそうになつた。

「ん、じゃあ発表するわ。結局一曲に絞りきれなかつたんだけれど、いいかな。ボカラから、えこまるさんのサークスの夜と参月の雨、ハートは万華鏡の三曲。欲張つてごめんな、でもこれだけは絶対皆で演りたいんだ」

この曲達を聴く度に何故か泣きたくなる。梓、愛、秋乃さんは是非とも歌つてもらいたい。多分、泣いてしまう。

サークスの夜と参月の雨、ハートは万華鏡は作曲がえこまるさん、作詞がはいのことんさんで構成されている。サークスの夜は落ち着いた曲調で、それこそ夜、雨、愁いを想わせる雰囲気がとても心地良い。何回聴いたかわからないくらい、毎日のように再生してきた。

参月の雨に關しても落ち着いた曲調なのだけれどどこか激しい。少女視点の歌詞も独特な心情を歌い上げる歌詞とメロディは流石の一言。深く深く俺の心に染み込んで、そして掴んで離さないのは言わずもがな、だ。

ハートは万華鏡はメロディがすゞしく惹き付けられるし、この曲もはいのことんさんの絶妙な歌詞が上手く混ざり合つて聴いてて体が動いてしまう。何度も何度もオーディオに向かつて沢山弾いてきた。独りで、だ。

因みに今提案した三曲は既に弾くことができる。初めて聴いた瞬間弾きたくてしかたなかつたあの日以来、し�ょつちゅう弾いていた。こんな日が来るのを小さなアパートの一室、オーディオの前で待ち焦がれながらギターを弾いていた。

「古音君三曲もなんだ、どれも知らないから早く聴いてみたいな」

「古音、本当に絞りきれなかつたんだな」

「でもでもいい選曲じゃんね。間違いないなあつ。早く演りたいな

つ

「雨姫君の欲張りつ。でも素敵な選曲。えこまるさんの音楽とはい

のことんさんの歌詞の世界観は私も大好き

次々に俺に言葉が浴びせかかる。確かに皆みたく厳選しきれなかつたけど受け入れてもらえたみたいでホッと安堵の息を小さく吐いた。

「えこまるさんの曲を選ぶ辺りがやつぱり雨姫君って感じだね。私も本当に好きだなあ、あの二人が作り出す全く別の世界、世界観」同調して愛もううんうんと頷いている。ふと思つたんだけれど、今田リストアップした曲、梓は全部知つてたんだな。んーやバい、ますます梓の iPod の中身が気になるな。聴いてる音楽の範囲かなり広そう。そんな事を思いながら夢の詰まつたルーズリーフを自分の前まで引き寄せて眺めた。

- ・相愛性理論

- ・ C P X
- ・ 赤橙
- ・ a f a c t o f l i f e
- ・ サーカスの夜
- ・ 参月の雨
- ・ ハートは万華鏡

そう可愛い字や俺の汚い字と其々の字で不揃いに彩られたルーズリーフからは、眺めているだけで演奏する俺達の姿が見えるような気がした。

ふと目の前のルーズリーフがぼやけた。何かなど思つていたら、ああ、なんだ。目に汗が少し溜まつていいんだな。一回駄目で諦めて、それでも本当に切望した事がこうして実現していつてる事に歓喜せずにはいられなかつた。

「みんな。本当にありがとう」

思わず感謝の言葉が出た。それとなく涙声がバレたかなと、はにかんでごまかしたけれど余裕でバレていたらしく、隣の梓が柔らかい微笑みを俺にくれた。

「いいんだよ雨姫君。私も今凄く楽しくて、もしかして夢なのかな?  
?なんて、ほつぺたつねつたりしてさ。笑っちゃうでしょ?だから、  
御礼を言つなら私のほうなんだよ?」

あの時、私の席が雨姫君の前で本当に良かった。と眼を瞑つてそ  
う言葉を紡ぐ梓はとても落ち着いていて、普段の梓とはちょっと違  
つた雰囲気を纏っていた。ふわふわと優しい感じはそのまんまで。  
偶発的にもやりたい事は最初は違えど同じ事で意気投合して、こ  
こまできて活動している。そんな小さな奇跡にそつと感謝の祈りを  
した。

「よーし楽曲揃つたね。うわああ早く演りたいなあ。ねえ雨姫、私  
早く演りたい」

忙しなく椅子から立ち上ると愛はアンプを置いてある隅っこに  
駆け寄り、「もう、我慢できないよ」「とベースケースからベース  
を取り出すと、セッティングを始めてしまった。

まあ実を言うと俺もかなりうずうずしていたので、やれやれと咳  
きながらも小走りでギターを出してチューニング始めた。

あつとこう間に愛はアンプの出力を上げ、部室は音に揺らされな  
がらも重低音に包まれた。俺もその音に答えるように音量を上げて  
いく。愛のアドリブに被せていく。

段々音が増えしていく。打楽器、ドラムの空氣を震わす音が愛と俺  
の旋律にうまく混ざりこみ、秋乃さんのエレキヴァイオリンとキー  
ボードが更なる彩りを加えてどんどん音は集まっていく。

重なり合い、混ざり合い、彩りが増し、段々気持ち良くなっていく  
る。マイクを持った梓がジャンプしたのを合図に全ての音が更に纏  
まり激しさを増した。

音が絡まり合い、振動する教室の中で、ああ。今日も遅くなるん  
だろうなど一秒考え、一秒後には奏でられる音に酔いしれ、また俺  
達は時間を見失ったのだった。



\* 2・4色 胡桃色コンファレンス（後書き）

今回、名前を引用した際許可を下わつてある様、はこのじ  
とん様、deco\*27様には感謝が止まりません。有り難うござ  
いました。

他にも様々バンドと曲を書いてしまいましたが、もしも関係者様、  
問題ありましたら連絡ください、至急手直しいたします。

お気に入りの曲をリストアップしてこつちまで楽しい気持ちになりました。  
書いていて楽しくて何度もギターに手を伸ばして執筆を中断してしまいました。

機会がありましたら、色音のカバーするリストアップされた楽曲達を聴いてみて下さい。どれも素敵な曲で愛して止みません。

## \* 2・5色 萌黄アルペジオ

定期的に訪れるさわやかな幸せ、微睡みの朝。

カーテンの隙間から差し込む朝の日差しと共に、小鳥達の可愛いらしい会話が爽やかにアパートの庭に響く中、淹れたての珈琲のいい匂いがこの小さなアパートの部屋の中を緩やかに巡り、ふわりと包み込む。

現在時刻は九時。俺はコピーした曲目リストアップのルーズリーの紙を眺めつつ、珈琲を口に含む。オーディオのリモコンを手繰り寄せて、再生ボタンを押すと、洒落た ja zz h i p h o p の優しい旋律が気持ちよく流れ、部屋をまた違った風に彩ってくれる。

「休日の、天気のいい朝つて清々しくつて気持ち良いなー…」

ついそんな独り言を漏らしてしまった位には日曜日の朝を満喫していた。

珈琲を飲みながらふと一昨日の放課後の事を思い出す。皆で考えに考えた演奏したい曲を発表しあって、コピーする曲を決めた。どの曲も本当に素敵で大好きな曲だった。

ルーズリーフに皆曲名を書き込んだ後、愛がもう我慢できなくつてベースをいそいそとセッティングし始めたと思つたら速攻アンプに繋いで弾き始めちゃつて。でもその時アンプから爆音を鳴らした時の愛の後ろ姿はなんだかライヴハウスで、SEが流れてこれから演奏が始まると心躍るあの瞬間に凄く似ていた。

部屋に心地良い重低音が空気を揺らしはじめた頃「仕方ないなあ愛は」なんて呟きながら俺もレスポールのギターにエフェクターとシールドを繋いで、チューニングし終わると愛の音量に合わせて音を出す。

愛の奏でるこのアドリブの音とリズムは本当にアドリブなのか? つてくらいセンスがよくて、そのベースの音を浴びて身体を揺らさ

ずにはいられなかつた。いつまでも聴いていたい、と思つた。

愛の音をある程度堪能してからその進行にコードを合わせて簡単なリフを弾いてみる。顔を上げてちらりと愛の表情を見ると視線が交差し、会わさつた。俺はバンドをやつていてゾクゾクする瞬間の一つに、演者との視線でのやり取りつていうのがある。言葉を介さずに全てが伝わつてゐるあの感じはもう最高に気持ちが良い。実際にその感覚に触れる事でしかあの魅力を伝えるのは難しい。

愛と交えた視線をギターに戻す。それと同時にミユート演奏でリフを刻むと愛は心底気持ち良さそうに微笑むとベースを弾いていた。音の波に身を任せるようにお互に激しく体を揺らす。

ふと先程までミーティングしていた机を会わせただけの簡易テーブルの方を見る。あれ、誰も居ない…と思つたら蓮時はドラムの横に立つてスタイルを使って腕のストレッチをしていた。

「飛ばしすぎ。いきなりはそのリフについていけそうになつての」

嬉しそうに、そう呟いていたように見えた。いや、言つていたと思つ。口の動きでなんとなくだけれど。そんな事を思つていた刹那、突き抜けていく打楽器特有の衝撃が愛と俺が奏でるアドリブのリフに乗つってきた。蓮時が放つドラムの音に意識がくらりとなるほどに痺れてしまつていて。

実質蓮時とのセッションはこれが初めてで、最初のINの時点でもう気持ちが良くて意識が飛びそうになつた。スタイルに刻むリズムにはぶれがあんまりなく、そのドラムの力強いうねりのある音は、愛と俺のアドリブの曲をまた一つ違つた色合いに彩り、完成度や快感度も激しく上昇していく。時折目を瞑り、リズムを刻む蓮時はこの瞬間を切望していたような凄みのある姿で、瞼を開けて目が合つた蓮時と俺は微笑んで頷いた。

続いて弾きながら秋乃さんと梓の姿を探す。秋乃さんも慣れない手付きでアンプを操作していて、音を出した時にその音量にびっくり

りしていた。可愛い。

それこそ秋乃さんとセッションするのは初めてだった。何よりもこういったスタイルでの演奏に慣れてないのでは?と以前尋ねてみた時、勉強の為にバンドのDVDを貸して欲しいですと頼まれたのでよく貸していた。バンド全体の空気感など、楽しめる事は勿論だけれど学べる事が凄く多い。実際、こうゆうセッションの経験は殆ど皆無といってもいい秋乃さんも、慣れない手付き慣れない環境という状況ながらも楽しめているように見えた。それはもう表情を見れば一目瞭然だった。

そしてそれぞれの楽器の音が絶妙に重なり合った所で、俺の持つてきた30Wのアンプにマイクを繋げた梓が、いつの間にかみんなの真ん中に立っていた。

ちゃっかり俺の目の前にもマイクスタンドを準備してくれた梓は全員が奏てる音を体全体で感じ、受け止めるように腕を広げていた。その表情は恍惚としている。

蓮時が、ちょっとした合図を出したのをきっかけに皆の音が一斉に止み、俺のギターの音だけが響く。時が止まつたかのようなこの空間にレスポールのディストーションの歪みが最高潮に気分を快感へと変えていく。

そして目配せをして全員が音を出したと同時に梓の声が部室に響く。とても透き通った、それでいて芯が強い、綺麗な声だった。体全体を使ってリズムの波に乗る。そんな梓もアドリブで適当な歌詞を楽しげに歌っていて、惚々とする微笑みがふわり咲いている。梓の歌う姿を眺めていると、チラチラとこちらに視線を送つてくる。まさかその適当な歌詞を歌えと?

どうしようか迷つた挙げ句、歌詞はわからないから適当に梓の歌声にハモつてみた。

五人の音が絶妙混ざり合つて激しい絶頂感を感じた。爆音を浴びて合わさって、本当に気持ちが高揚した。

その刹那、ドラムの音が消える。続いてベース、エレキヴィアイオ

リンと音が消えていく。どうしたんだ?と辺りを見渡すと、見覚えがあるというか先日もお世話になつたと思われる先生が渋い顔をしてドアに身体を預けていた。

「う、うわ…これはやばい

そう気付いた時には既に、時計の短針は…よく見ると時間は一応まだ八時前だつた。それでもまあ遅いといえば遅い時間帯だが。

「何度も遅くなつてすみません、すぐ片付けます」

俺がそう頭を下げながら片付け始めるとメンバー皆、肩で息をしつつ額に汗を滲ませながら片付け始めた。

「楽しいのは凄くわかるんだけれど、帰りが遅いと心配なの。あんまり遅くならないようにね?」

「ん?」この声、なんか聞き覚えがあるな…と思って顔をよく見てみた。よく見てみなくて俺のクラスの担任の中野先生だつた。なんとなく先日叱られた先生だと思つていたら、今日は中野先生だつた。

「中野ちゃん!」

「なかのっちゃん先生だー!」

梓と愛が中野先生に気付くとなんだか近しいあだ名で呼んでいた。威厳もなにもあつたもんじゃないな。

「こらこらちゃんと中野先生と呼びなさいな、まつたく。ほりちやつちやと片付けて帰るわよー」

中野先生の掛け声もあつてか、実にスピーーディーに片付け終わつた。そして、各々ギター・ベース、エレキヴァイオリン等荷物を背負つたり学生鞄を肩に掛けたりして帰る準備が整つた。

「ああ、なんだか体が痛いな。この感覚久しぶりだ。あ、中野先生さよなら」

「はいさよなら。寄り道しないで帰つてね皆

部室から全員出るのを確認して、中野先生に別れの挨拶をする。寄り道か、それもいいな…つといけない、今さつき駄目だつて言われたばかりだつた。そしてちらつと横に並ぶ色音部員を見ると、「ね

えねえどっか寄り道しちゃおうか」等と楽しそうに盛り上がり始めた。中野先生ごめんなさい、この人達多分貴女の言つことを聞いてくれそうもありません。

「でも…今日は本当に楽しかったわね」

秋乃さんが下駄箱の手前で咳く。それまで騒がしくしていた愛と梓も、同意しているのか秋乃の方を見つめて静かに頷く。そんな二人も月明かりに照らされて、その女の子のやり取りがまるで映画のワンシーンみたいだなあって思つてしまつていた。

下駄箱にて靴を上履きからローファーに履き替え、ずり落ちて落ちそうになつたギターと鞄を背負い直すと玄関から外へ出る。まだ少し肌寒い、初夏の夜の風は俺達の間を優しくすり抜けていった。

「今日は充実した活動だったね、雨姫君」

「うん、コピーする曲も決まつたし、漸く全員で演奏できたし最高に楽しかつた」

そう言つと梓はなにやら俺の顔を覗き込んで「口」をついている。な、なんだ、なんか顔についてるのか？ そう思つと顔をなんとなく軽く擦つてみた。

「いや、雨姫君すつごく楽しそうだつたなーって。ギターも上手くて雨姫君凄く格好よかつた。なにより、そんな姿の雨姫君や皆を見て色彩音楽部、作つてよかつたなーって」

「かつ…格好いいとか、照れますから。でも…うん。乐しかつたよ本当。作つてよかつたな色音部」

月の淡い光に照らされた梓の表情は嬉しそうに微笑んでいて、それがなんとなく幻想的に見えて、そんな目で見つめられるともうどうしていいのかわからなくなつてしまいそうになつた。それこそ、映画のワンシーンのように。

「それに、今日のセッションで、雨姫君の声とギターの音を聞いて私の中に沢山の色が溢れてきたの。本當だよ？あの感覚は、不思議だつたなあ。だから、忘れちゃわない内に帰つたらちょっと描いてみようかなつて」

ふわふわと優しい笑顔を咲かせると、愛と秋乃さんの方へとてと歩いていった。そして俺の横を静かに歩く蓮時とも、先程下駄箱で思わずハイタッチをしてしまっていた。それだけでお互いが伝えたかった思いは伝わったと思つ。

五人を包む初夏の夜風は月の仄かな灯りの静けさに先程までの演奏の名残を少しだけ感じつつも、確かな手応えと共に、皆で帰つたのだった……

「つと、珈琲ちょっとねるくなつちやつてら」

昨日の事を少し考えるつもりが思いのほかよく思い出せたので深く思考してしまつた。楽しかつた。そしてもつともつとあのメンバーで演奏したいと思つたし、もつとギター上手くなろうつて改めて思ったのだ。

と、いつことで日曜日は個人的にリストアップした曲の練習をしようと思つていて、珈琲を飲み終わつたら何の曲から始めようかななんて、なんかゆづくりマイペースだけれど、それくらいが俺には丁度いい。

切羽詰まつてギターをやつても、樂しいつていう感覚たぢかが忽ち薄れていつて虚しくなつたこと昔あつたから、余計に。

結局珈琲をぐいっと飲み干すと、何となしに新しくまた珈琲を注ぎ直してしまつたので、そのまま珈琲を部屋に持つていく事に。

「あー珈琲美味い」さてさて、何から演つてみるかな

曲のリストが書いてあるルーズリーフを眺めながらテーブルに置くと、部屋のスタンドに置かれたレスポールギターを取り出す。無意識にチャカチャカとミュートピッキングしながらルーズリー フを暫し眺めてみる。

「じゃ、まあ一番上の相愛性理論から順番にやつてみますか」

ルーズリーフの曲目の一一番最初に書かれているのは、相対性理論だつた。珈琲を一口飲むとオーディオに向かつてリモコンを操作す

る。CDの読み込み音の後、イントロが始まったと同時に合わせてギターを弾いた。

アンプに繋いでいない、レスポールの生音がオーディオの相愛性理論の音に乗つかっていく。何回か弾いてみたりしていた曲だったので、あらまし弾くことができた。弾いている途中、何度か間違つたりはしたもののが楽しく弾くことが出来た。メンバーと弾けたならどんなに気持ち良いんだろうと想像しただけで顔がにやけてしまう。

結果としてはまだまだ練習が必要だった。いざバンドのギターパートとして演るとなればもっとスマーズに、ミスも少なくしないときつと、ギター弾きながらちゃんと歌も歌えない。でもプロって訳でもないからたまにミスしたってかまわないのかもしれないけれども。上手くはなりたいと思う。

でもまあギターを弾いていたのは午前中の二時間位。一通りの曲は弾いてみたけれど曲目に関係ない曲を弾いていた時間が実は多かったのは『愛嬌』。オリジナルを考えて弾いてみたり、好きなバンドの曲をひたすら弾いてみたり。

後はもう指先が痛くなつたので一時中断。その後は音楽流しながら『ご飯を作つた。我ながらこのカルボナーラパスタは改心の出来だつた。温泉卵っぽいのも作つたしすごく美味しくできた。

お『ご飯を済ませた後はちゃんと洗い物をして片付け、食後の珈琲を用意すると大きめのビーズクッショーンに腰を沈め、ゆっくりと本を読みながら過ごした。

ふと目に入った広告に載つている安売りの卵ともやしを早く買に行かなきやなあなんて考えながら『うだらだらしていのそ時携帯が鳴つた。

「んー…ん? 誰だろ?」

ちょっと離れた所に置いていた携帯をとるために体を仰け反り手を伸ばす。背骨がボキボキと鳴つて少し痛くて気持ちよかつた。携帯を開いて見てみると愛からの着信だった。

「雨姫おはよーう、今なにしてるのー？」

「おひ、おはよ。んー？ わつき昼飯食つたとーー」

「ほほう。因みに、なにを召し上がられました？」

「ん、カルボナーラ」

「おおつーで、あたしの分は？」

「ねーよ、全部食べたわ」

携帯からでもずーーんつと残念がつてゐるのが伝わつた。いやいや、普通一人暮らしなら自分の分しか作らないでしよう。元気、「ま、カルボナーラはいつか雨姫に作つてもらう事として…今からや、ちよつと一緒に出かけない？」

「一緒に？」

愛とは幼馴染なので今でも時々一緒に出かけたり、買い物に付き合つたり付き合つてもらつたりしていただけれど、最後に一緒に出かけたのはいつだつたかな。覚えていないけれど高校になつてからは無い。だからこりつして誘われるのは凄く久々に感じる。

「うん。フレンドールに付き合つてもらいたくつてさ。ほら、ベー

ス見に行きたくつて」

フレンドールといふのは、駅前にある楽器屋の事だ。因みに俺の使つている機材は大体そこで買つていたり、置いてない物は注文してもらつたりしている。そしてフレンドールの店員さんは殆ど全員と仲良くなつていたりして、その店員さんの中にはセミアコのギターを譲つてくれた近所に住む氣の良い兄さんも含まれている。とても身近にいる尊敬するギタリストだ。

「あー、うん。全然いいよ。丁度俺も駅前行きたかったし」

「ほ、本当つ？」

愛の声が心なしか弾んだ気がする。氣のせいかも知れないけれどなんとなく、そんな気がした。

「うん、もう行く？ 一応いつでも出られるけれど」

そう伝えると、玄関からチャイムが鳴り響いた。あんまり鳴るこのないチャイムには慣れていなくて毎回びっくりしてしまつ。

「あ、ごめんまた掛け直すわ」

携帯の通話終了ボタンを押すとそのままテーブルに置き、小走りで玄関へと向かう。少し古いドアをゆっくり開くと、そこには先程まで通話していた相手が小首を傾げてそこにいた。

「……」

「えへへ、もう来ちゃった」

これなんてギャルグですか？とかいつてもまあ実は愛が遊びに来る時つて何時もいきなりだつたりするので慣れたものだが。休みなので当たり前なのだが今日の愛は私服である。髪型はよくアップにしている後ろ髪を下ろしていく、ワツクスかなにかで動きがついているその髪型はいつもと少し違う大人っぽい印象を受けた。服はライトブラウンな色調の花柄のワンピースにレギンスを合わせている。胸の辺りには沢山の輪や装飾がされた三日月のアクセサリーをしていて、女の子っぽさも兼ね備えた絶妙なバランスだ。まあ、久々に見た幼馴染の私服姿は可愛いかつた。

「どうしたの？」

「あ、い、いや。じゃあちょっと待つて？すぐ準備するから」  
ばたばたと部屋に戻るとテーブルに置いておいた携帯をポケットにねじ込む。因みに今日の服はお気に入りのダメージジーンズ。白黒のボーダーロンTの上に古着屋さんで買った薄いアイボリー色したTシャツを重ね着したラフだけれど凄く気に入っているスタイル。財布をジーンズの後ろポケットに突っ込み、黒ぶちのメガネをかける。学校ではコンタクトなのだけれど、休みの日や部屋ではメガネで過ごしている為、今日はメガネで出かける事に。

「おお、雨姫のメガネ久々。メガネいいですなメガネ」

準備が終わって玄関の鍵を掛けていると後ろでぼそぼそと愛が眩っていた。学校以外で会うのは本当に久々だからだろうけれどメガネ姿がなんとなく気になるらしい。

「まあ今日休みだからなあ？休日と部屋に居る時はコンタクトは外してるし。ほい、じゃあ行くべ

「そつかそつか、えへへへメガネいいなあ。あ、うん！」

愛の懐かしいような心地よい雰囲気は昔から変わらずに無条件で安心するというか落ち着くもので、錆び付いた階段を下りると後ろから楽しそうに付いてくる愛を眺めると自然と笑みがこぼれている。「んんー、気持ち良い！今日は天気いいねー」

「そだなー……いー天氣だわ。あ、俺後で卵とモヤシの安売り行くからな」

晴天の土曜日の中後、他愛も無い幼馴染との会話。向かう先は楽器屋。ついでにCD屋にも行きたいし、スーパーの安売りには遅れられないなあなんて考えていたら足が止まっていたらしく「早くしないとおいで行っちゃうよー」なんて愛の声が聞こえてきた。

なんか緩いけれど妙に心地良いなんともいえない感覚で、この綺麗な青空を仰ぎつつ幼馴染と一緒に駅前に向かって歩きだしたのだった。

「わー、今日も人いっぱいだね駅前」

透き通るような青い空にわた飴のよつた雲がぶかぶかと浮かんでいて、それを眺めていると初夏の風が体全体に爽やかに吹き抜けて気持ちがいい。現在日曜日の午後、ひょんな事から幼馴染と楽器を見る為に駅前にやつてきていた。

俺の通う姫神高校の名前の由来でもあるこの自然が豊かであり、程よく拓けている姫神市。その姫神市の駅前には様々なショップがある。有名な珈琲屋や、夜は激しく賑わう居酒屋。幾つか建つているビルの中には沢山の服や雑貨、本やCDを扱っているショッピングセンター。姫神市に住む住民は結構駅前に買い物に来ていて、ここには大体の物が揃っているからだろうな、実際俺もよく駅前に足を運ぶ。

今日は愛と楽器を見に行くということで、行き着けの楽器屋さんのフレンドールに向かっていた。まあその流れで帰りとかにCDも見たいし、本も見たいとどんどんしたい事が増えていくので気を抜くと財布の中身がちょっとした氷河期に入るので、財布の紐を縛らないと大変な事になるから油断できない。

駅前までの道のりはそれ程距離がある訳ではなく、まあ近くもないのだけれど。俺の住むアパートから幼馴染の愛と他愛も無いような会話をしながら二十分と少し位歩いた所で駅前に到着してしまった。「そういえば愛はなんか欲しいベースって目星つけてるの?」

「うーん…普通のエレキベースも勿論欲しいんだけど、雨姫から貸して貰ってるから…アップライトベースがあつたら弾いてみたいなって。もしあたしに合つならいつか欲しいなって思つてたんだ。でもでも近々買いたいって思うのはやっぱ自分のジャズベかな。プレベも欲しいけど」

「アップライトベース、か。マニアックというか目の付け所が凄い

な

「雨姫から教えてもらつたアップライトベース弾いてるバンドのP  
V見たときにはカッコいいし音もよかつたんだよね」

「あー、こないだ教えたバンドか。カッコいいよね。まあ俺もそのP  
V見たことがあるけど……多分フレンドールには無いと思つよ。置いてあるの見たことないし」

「がーんっ……そなんだー」

「アップライトベースは珍しいからね。でも確かにウッドベース出身の愛にはしつくりくる楽器かもね」

「今すぐ欲しいって訳じゃなかつたからいいけどね。だとするとやっぱり私はジャズベースかな」

今話題に上がつたアップライトベースは、エレクトリックウッドベースといえばイメージしやすいかも知れない。軽量化されたボディは勿論軽くてびっくりするくらい薄い。以前ではウッドベースの代用品として扱われるところが多くつた時期もあるんだけれど、今は一つの楽器としての地位を確立しジャズ系の音楽は勿論ロック、ラウドやエモ、スカ等激しいロックにも使われる事が多くなつた。

因みに今愛に貸しているベースもジャズベ、所謂ジャズベースというものの。まあ有名なメーカーのものではないけれど。

ジャズベは、プレシジョンベースのサウンドをさらに拡張し様々なジャンルに適応させたモデル。ピックアップがフロント側とリア側とで一個搭載されるようになった為、二つのピックアップのバランスを調整する事で幅広い音作りや、芯のある中低域、全体的な音の多さが特徴となつてゐる為、多くの人に人気である。

「なるほどね、何かこうやって自分の楽器買つ時とか選んでる時、試奏してる時とかさ、楽しいよな」

「うん、本当に合つべース見つかるといいなあ」

そう呟くと満開の微笑みで頷く幼馴染は活き活きしててこひらま

で楽しさなつてくる。楽器屋に並んだ沢山のギター・やベース等の楽器を見ているだけで、高揚する自分としては楽器選びに付き合ひの事は樂しくて仕方ないのだ。

愛と他愛のない話題を交えつつ歩いてくると、件の楽器屋のフレンドールが見えてくる。駅を出の前に見て東側に並ぶビルやショッピングの奥、曲がり角の所にフレンドールはある。

外観はそこまで新しいものではなく、入り口の上には存在感のある看板がある。昔から経営している為か外壁が所々錆びたり傷んでたりしているけれど、それも雰囲気があつて個人的には好きなのだ。

店の中から溢れる楽器屋独特の雰囲気と、流れる好みの音楽に流れで早速入店する。

「いらっしゃいませー… って、おーう雨姫か

「どもども」

もう既に顔見知りの店員さんが俺の顔を見るとしつ挨拶する。俺の隣にいる愛も会釈すると、店員さんがなにやら意味有りげな視線を送ってきた。恐らく「女連れてきやがつてこのやうつ羨ましいなてめえちきしょ」あたりなのだらう。会うたび彼女募集中なその店員さんは必要の無い空気を読み、店の奥へと寂しそうに消えてしまった。多分だけれど彼女だと勘違いしたのだらう。幼馴染なんだけれど、愛が俺のことそうゆう風に……いやいやいやそんなギヤルゲみたいな展開なんてないって、うん。

「うわー、あたしフレンドール来たの何年ぶりかな。何かさ、こぞ楽器を出す前にするとやっぱりテンション上がっちゃうね」

陳列された沢山の楽器達を眺める愛の表情はほんのり朱色に染まり、興奮しているのが一目でわかる。まあ俺も人の事は言えなくて、実際今凄くテンションがどうしようもなく上がってしまっている。スタンドに立てられた色とりどりのギター、レスポールやジャズマスター、ストラトにテレキャスター等の様々なモデルに、高くて手が出ない憧れのブランド。棚に陳列された喉から手が出るほど欲しい

「おうふ…ふおおお…」

「ちょ、ちょっと雨姫ど…」「のっ？ 今日はあたしの楽器一緒に選んでくれるんでしょう？」

「おつといけない、愛に止められなかつたら思わずふらふらと田に入つた憧れのギター目掛けで行く所だった。だつて喉が渴いている人の目の前に美味しい水があつたら…ねえ？」

「もう……えーっと、ベースのコーナーはどこかなつと」

腕を掴まれ半ば引きずられる形で連れて行かれる。これが意外と痛いので、良い子はまねしちゃいけませんよ。友人は優しく引っ張りましょう。

「いやいや、ねえ自分で歩けますから、決して単独でギター見に行つたりしませんから離して下さいお願ひします愛さん」

そうお願ひする俺をちらつとみて「仕方ないなあ」なんて呟く愛は、言葉とはうらはらになんだか機嫌がすごく良い。久々の楽器屋を楽しんでいるんだなと思うと、なんとなく腕の痛みが気にならなくなるくらいには嬉しくなつた。

「おお…ねえみてみて雨姫、沢山あるねっ」

スタンドに立てられているのと、壁に掛けられた様々な楽器を見ると愛は感嘆の声をあげた。薄く塗られたグロスがやけに色っぽく感じる唇も、緩く弧を描いてにやけつぱなし。

「何か気になるのあつたら試奏させてもらつたらいいよ」

「うんっ、そうする。じゃあ……一番気になったこの子かなっ」

一通りベースを眺めて、愛が手にしたベースは少しくすんだような、乾いたような茶色のサンバーストで、味のある塗装の綺麗なジヤズベースだつた。鈍く光るボディーと、なんだか異様に重厚な存在感を放つ力強さで、その奏でる音はきっと良いのだろうなど早く聴きたい衝動に駆られた。

「おお…綺麗なサンバースト。色の感じは俺も好みだな。メーカーもまた凄いの選んだな、早速試奏させてもらいまよ」

店員さんを探そうと辺りを見渡すと、いつも世話になつていて近くに住んでいる藤さんがなにか修理中なのか、工具をぶら下げながらちよづく近付いてきた。

「おう雨姫、いらっしゃい。なんか見にきたの？ つと、もしかしてその娘がこないだ言つてた雨姫のバンドのベースの娘？」

藤さんの姿はくせつ毛の黒髪で、長さは長くもなく短くもない。整つている顔立ちに男らしい輪郭で、顎には髭がお洒落に生えている。ジーンズとバンドTシャツ姿に、淡い緑色したフレンドールの名前が入つたエプロンをしている。言わずもがなギターが凄く上手く、格好良くて身近にいる憧れの兄ちゃんなのだ。

「久々です藤さん。そういう、この娘が幼馴染の愛でベース弾いてるんだ」

「い、こんにちは。初めまして、望月愛つていいます」

藤さんの登場に見るからに緊張している愛は会釈しつつわざわざ挨拶した。

お互ひの軽い自己紹介をした後、早速藤さんに頼んで試奏させてもらひことに。愛が選んだサンバーストのベースを持って、アンプが置いてあつて試奏できるスペースに三人で移動する。

「渋い色選んだねー。うん、俺も好きだなこのジャズベ。弦高も低くて弾きやすいし」

因みに藤さんの言つ弦高というのは、ギターやベースの指板と張つてある弦との間の高さの事だ。実際にフレットを押さえてみれば、その押さえ易さを理解してもらえると思う。まあ弦高が高くても勿論メリットはあるんだけれども。

藤さんは椅子に座ると、手際良くセッティングを済ませてチューニングを終わらせる。藤さんが弦を指で弾くと、アンプからはサンバーストのベースが奏でる重低音が鳴り響いた。

「おお…雨姫、ねえ雨姫」

ベースから目を離さずに俺の袖をくいくいと引っ張る。はやる気持ちを隠せない幼馴染の様子はまだ小さい頃の愛を見ているよ

うでなんだか懐かしくなった。

「はい、いいよ。じゃあ望月ちゃん試しに弾いてみて」

「は、はいっ」

チューニングが終わった藤さんが、試しに適当に弾いたのであってたつた少しのフレーズが妙に耳に残つて、でもそのフレーズが凄くカッコよくて一人して目を合わせ驚いている、愛は嬉しちずかしそうに藤さんからベースを受け取り、椅子に座る。自分の愛器になるかも知れないベースを太股の上に乗せ、じつくじ眺める。ネックを握つたり弦を触つたりしながら瞞みしめている愛の表情はもう緩みっぱなしやうだった。

「な、なんだかそんなに見られると緊張しちゃいます」

藤さんと俺を見上げながらはにかみながらも、愛は少しづつベー<sup>は</sup>スの感触を味わつている。

「ま、ゆっくり試奏してつてよ。またなんかあつたら近くにいるから呼んでくれな、雨姫」

愛の気持ちを察したのか、藤さんはこの場から離れていった。実際試奏する時に店員さんが見ている前で弾くのは恥ずかしいと思う人つて実は結構いるのだ。俺はむしろ近くにいてもらひつて色々話しながら試奏したいタイプだけれど。

「ネック握つた感じ……しつくりくる」

そう呟くと愛の指が弦を弾きだした。<sup>は</sup>滑らかな運指から奏でられるベースの音は力強くアンプから流れだし、その重低音に思わず指がつられてピクッと反応してしまう。

「へえー良いね、音がやつぱり良い。愛はどうよ、弾いてみてどんな感じだった？」

「惚れた……あたし、とうとう出会つちやつたかもしない」

そう呟く愛の瞳がありえない位キラキラして、頬に手を当てている。なんだかちょっとした少女漫画のような表情をしている。恍惚と膝の上に乗っているジャズベースを見つめ、自分の世界に入ってしまつていて何度も肩を軽く叩いて呼びかけても反応がない。頬

むからベースにその垂れかかっている涎だけは垂らしてくれるなよ、凄く高いんだからと小さく呟く。

「おーう、もう試奏はいいのか」

藤さんを見つけ、小さく手を上げるとまた藤さんがやってきてくれた。フレンドールのHプロンの中に今まで持っていた工具が入っている。

「凄く気に入つてた、この通り。もう完全に余韻に浸つてるね」

「おお……本當だ。なんか、ここまで恍惚としてる女の子って滅多に見れないよな。まあ気に入つてくれたのなら嬉しいわ。あ、俺今ちょっと壊れてしまったからギター直してくれつて依頼の仕事忙しくてさ、後で今野<sup>いまの</sup>こっちに呼んどくから、何かあつたら今野に言つてくれ」

「あ、うん。わかつた。忙しい所ごめん藤さん」

今話題に上がった今野さんは、凄く背が高くてフレンドールの従業員の中でも頭一つ抜きん出ている。身体の線はスマートで細くて纖細な印象を受ける。髪型は天然のパーマ。今野さんはこの店でも信頼されている技術者であり販売員だ。それに藤さんが趣味でやつてているバンドのベーシストもある為、前に姫神山のフェスの裏方をやつた際に、オープニングアクトで出ていた藤さんのバンドで今野さんを知つて、打ち上げで紹介されてから仲良くなつたのだ。因みに、ドラムの人はこの店とは違う所、まあ駅前なのだけれど美容師として働いていて、名前は小野寺さんといつ。

少し足早に去つていく藤さんの姿が見えなくなつた数分後に、今野さんがゆつくり歩きながらやつてきた。

「おー、いらっしゃい。今日は雨姫くん一人じゃないんだ。お、ベース?」

愛の膝の上に乗つてゐるベースを見ればそう呟いた。フレンドールのHプロンのポケットに手を突つ込みながら愛の近くに来て試奏中であるベースを眺めている。

「いや、また渋い色選んだね。因みにこのフレンズデールにあるベスでもこいつはかなりお勧めかな。少し学生にはキツい値段ではあるけれどね」

今野さんはそう言つて、愛は正氣を取り戻したようで、よつやく自分の世界から帰ってくれたみたいだった。少女フュイスも戻ったし、涎は大丈夫、垂れていない。

「あ、あのっ。これ……この子欲しいんですけど」

「うおおおい、ちょっととまてちょっととまて。値段！ 値段ちやんと見たか？十七万ちょいじゃん、即決するのは早いって」

びっくりした。ああびっくりした。久々にがつたり突っ込んじゃつたよ。そう、この幼馴染は直感で欲しいと思つたら大体その場で買つてしまふのだ。今まで小さい頃に何度もそういう愛を見たことがある。

「そ、そりがなあ。でも、うーん欲しいなあ」

駄々をこねる子供のように唇を尖らせてベースを撫でている。そんな愛の姿に今野さんは心なしか優しげに笑つてゐるよつて見えた。大人な笑顔。

「えつと、望月ちゃんだけ？もしなんだら特別ローンとか組めるけど、どうしようか。別に今焦つて決めなくてもなんなら寄せとくし」

「わわ、特別ローン！すごい助かります。うーん……ねえ雨姫、どうしたらいいと思う？」

今野さんからの魅力的な提案に悩む愛は、膝にベースを抱きかかえながら見上げている。自然と上目使いになつてゐる、うん。そんな愛にちょっとドキッとしてしまつたのは内緒。

「そうだなあ。やっぱり財布と相談、だよな。ローン払えるかを考えるのは勿論として、やっぱりこいつゆうのって勢いですよね今野さん。ぶっちゃけ俺も勢いでギター買つたし」

「うん。レスポールだつたよね確か。何度も見に来ては試奏して、藤に取り置きしてくれつて頼んでたもんね」

「いやあ、恥ずかしいです。でもあの時は売れないと心配だったんですね凄く」

「買い手が付きそうに何度もなったんだよ実際。でもずっと雨姫くんに渡るより、雨姫くんのところにいくよりあのレスポールも待つてたんだねきっと。結局やっぱり雨姫くんのところに渡つていった」無論頑張つてバイトしながら貯金をちゃんとした上でだつたし、偉いと思つよ。と今野さんは付け足してくれた。うつーん、こりやちょっと照れる。

その後、愛はしばらく悩んで買うことに決めたようだつた。もともと自分のベースを買う為にずっと貯金していたらしく、何より気に入ったからだろ。」

「じゃあ、今日持つてく？ 持つて行くなら今さわっと微調整して渡すし、発送して欲しいなら梱包して送るけど」

「今持つて行きます、持つて帰りますっ」

わかった、ちょっと待つてと微笑むとベースを持つて店の奥へ今野さんは準備しに行つてくれた。

「ねえ雨姫、ねえねえ。えへへへー嬉しい」

これ以上ない満面の笑顔で小突いてきた。あーものすごく嬉しそう。煌びやかな粒子が飛び散つて。楽器を買う、ところは俺も何回か経験しているけれど、うん。愛の気持ちはずごくわかるのだ。

「良かったじゃん。大切に使いなよ」

「うんっ、勿論。あ、雨姫のベースって返した方がいいかな？」

そう、愛には一応無期限でベースを貸している。安いけれど気に入つてゐるベースだ。

「ああ、愛がもう使わないなら返してくれてもいいし、もしまだ使ふなら借りてもいいよ」

「そつか。じゃあ……借りてもいい？」

「うん、全然いいよ」

そんな会話をしていると、レジの方から今野さんが手を上げて、

準備できたよー」と声を掛けてくれた。嬉しそうに椅子から立ち上がり、愛に引つ張られるように一緒にレジへと向かつ。

「お待たせ、じゃあ代金はこれね。後は返せそうなとき持つてきてくれればいいから」「

「ああ、その返せるときつて特別ローン本当に助かります」

勿論信用あつての特別ローンなので誰でもこのローンを組めるわけではない。気に入った、信頼できる相手のみだ。フレンドールで特別ローンを組めるようになつてているのは、多分藤さん達も過去に楽器、ライブ等でお金に困つた経験があるからだろう。やっぱり楽器はなかなか手が出せないのは俺も身をもつて経験しているし。

「ありがとうございましたー。帰りは気をつけるんだよ」

今野さんがカタカタと慣れた手付きで会計を終えると笑顔でそう挨拶する。その声を聞いて奥から藤さんが顔を出して小さく手を上げるとふわっと微笑んだ。藤さんのそういう何気ない仕草がなんか格好よくて、また来たいなつて気持ちにさせてくれる。

店を出ると太陽もだいぶ傾いていて、久々の眩しい光に少しが眩んだ。愛はでれでれしながら背中に背負つているベースを自慢げに見せてくる。本当、愛は変わらないんだよな昔からいつも所。

「弦とか色々サービスしてもらつちやつた。えへへへ、嬉しい」

「良かったな。まあとりあえず折角新品のベース買つたんだからぶつけたりしないように気を付けてな」

「ふふん、わかってるもーん」

「いや、まあ気を付けているなんならいいんだけどなんかほわほわしてるから危なつかしくてな」

「だつて、嬉しいもん」

フレンドールから出て駅の方にあるCD屋へと向かつて、途中、愛は気を付けるもんつと言つた直後、駐輪している自転車にぶつかりそうになつっていたから、やっぱり発送してもらつたほうがよかつた気がする。うん。

「あたしの用事はもう済んだから、あとは雨姫の買いたい物に付き合つよ。確かにCD見に行きたいんだったよね？」

「んー、そだな。ちょっとCD欲しい新譜たまつちやつてるから売つてたら何枚か買いたいかも」

「あたしもちょっと見たいから、今からこいつか」

数歩先に歩いてつて振り返つた愛の微笑みは、傾いてきた太陽の光のせいか、初夏の爽やかな風のせいか、沢山の光を浴びた愛は何かの映画のヒロインのように眩しかつた。不覚にも見蕩れてしまつた

丁度駅とフレンドールの中間らへんにあるビルの地下にあるCD屋には、来た道と一緒に戻つて数分で到着する距離なのですぐ着いた。

ビルの中に入ると、一階から最上階までファッショングループがひしめき合つてゐる。正直販売してゐる服の値段が学生には厳しいほど高いので、俺はあまり見に行くことはなかつたりする。地下にはCD屋の他に雑貨屋も展開していて、CD屋での買い物した流れで雑貨屋にもよく足を運ぶ。

「相変わらず」この地下は居心地いいな

「なんかこの『ゴチャ』『ゴチャ』した感じとか雨姫好きそつた感じだもんね」

「まだ『ゴチャ』『ゴチャ』してたら、なんか嫌だけど此処の『ゴチャ』『ゴチャ』感は好きだな」

「いつも所に来るとやっぱり財布の紐緩くなつちやうよね」

「やうだな、つて愛はちゃんと縛つとけ。今日でつかい買ひ物したんだし」

「えへへへ、そーでした」

地下へと続くエスカレーターを並んで降りながら他愛もない会話をする。その際も愛は背中にある買つたばかりのベースが気になつ

ている様子でちょいちょい触つたり撫でたりしていた。いやまあ気持ちはわかるけれど。

そんなやりとりをしながらCD屋へと入る。視界に広がるCD、CD、CD。視聴機も沢山設置されていて、入店した途端俄然テンションが上がつてくる。

「いらっしゃいませー」

店のロゴがプリントされた黄色いエプロンをした店員が笑顔で挨拶をしてくれる。そんな店全体の雰囲気も、とても好きだ。

「さてさて、探しますかね」

そう呟けばお手当てのCDを探しに店内を歩く。欲しいCDは数えればキリがないので厳選しなければならない。最初は何探そうかなーと考えていると、後ろで愛が「わわっ」と声をあげていた。

「どしたの?」

「えっ、あ、うん、えへへへ、うん」

見るからに拳動不審な愛の様子に首を傾げていると、後ろから聞き覚えのある声がして振り替えるとそこには秋乃さんがかごを腕に掛けて立つっていた。

「あら。あーん、えーと、望月さんちよつといいかしら」

ふわり微笑む秋乃さんは初めて見る私服姿で、そのあまりの可愛さに目を奪われてしまった。

ふわふわ揺れるパーーマが掛かった髪は、今日は結つておらずに降ろしていた。オーガニックなワンピースに、薄い黄色系のカーディガンを羽織っていて、落ち着いている初夏を思わせる絶妙な色合いはとても秋乃さんに似合っている。その姿は見るものの視線をかつさらつしていく可愛さだ。オーガニックなワンピースに白いミニスカートがまた上手くコーディネートされていて、正直見とれてしまっていた。いや、決してワンピースとミニスカートからすらつとのびる綺麗な生足に目を奪われたわけではない。……嘘です、がつり奪われましたすみません。

愛は秋乃さんの可愛らしい手招きの方へとふらふらいってしまった。きっと所謂ガールズトークというのが始まったのだろうと、邪魔しないように俺は一人CDを見に行くことにした。

「あつたあつた、これこれ」

今では独り言になってしまったけれど、ジャパニーズロックコーナーに到着した俺は、お目当てのCDを見つけていた。本当は買いたいCDは沢山あるのだけれど、毎回財布事情により諦めてしまうCDが多くて、いつも歯痒い気持ちになる。

「古音君、欲しいの見つかった？」

欲しかったCDを何枚か諦めて、一枚程棚から取り出したところで、後ろから秋乃さんが天使のような微笑みで話し掛けてくれた。何だろう、気のせいかもしれないけれど、店内の男性客から妬みの視線を感じる。いやごめんて。

「あ、はい。すごく悩んだ末の一枚ですけれどね。まだ洋楽とJAZZ HIPHOPもまだ見てないから多分今日は財布寒くなりますわ。秋乃さんも、CD買いにきたんですか？」

「うん。私色音部に入部してから今までより音楽聴くようになつて結構CDも買うようになつたんだよ」

「おお、なんかそうゆうの嬉しいです」

「それに梓ちゃんと一緒に画材買つたりしてるしね」

「あー、そうなんですね。近々またなにかみんなで描いたりしたいですね」

「うんうん。あ、折角だから私のCD選び付き合つてくれない？」

「勿論ですよ。むしろこっちからお願ひしたいくらいです。そういうえば、愛はどういったんですか？」

「望月さんなら、みたいCDと雑貨があるとかで、見に行つたみたいよ？」

「あー成る程、そうですか。なんだ一言いえばいいのに」

なんだろう、今なんだか少し引っかかるような気がするけれどま

あ不粋な事は考えないでおいつ。折角秋乃さんもいつ言つてこる」とだし、一緒にCD選びをする事にした。

「秋乃さん今日はどんなの買ひにきたんですか?」

「試聴機とかでオススメされてるやつとか、ネットで調べて聴いたバンドのCDとか欲しくてね」

隣で微笑む秋乃さんの腕にぶら下がつているカゴには既に何枚かCDが入っていた。

「でもあらまし選んだから、あとは折角一緒にCD見てるんだだし古音君オススメの一枚をと思つて」

「おお、なんかそうゆうシチュエーションも嬉しいです。ちょっと照れますね。うーん何のバンドがいいかな、どうしよう?」

オススメのCDはなに?と聞かれると嬉しくなる反面何をオススメしたらいいのかすぐ悩む。例えばジャンルはなにか、とか。今回はロックだけれど、そのロックにも色んな形がある訳で、バンドによつてその色が違つている。分かりやすいとこだとメタルやハードコア、グランジ、メロコアやエモなどの激しいバンドか、落ち着いたバンドなのかとかである。

「あ、このバンド、すご~くクリーントーンが澄んでてお洒落な曲作つてて、俺は好きですけどね」

「えつ、本当? どれどれ」

お気に入りの一つのバンドの1stアルバムを棚から取り出すと、秋乃さんが近くに寄つて覗きこんでくる。

「どうか、秋乃さんからシャンプー、もしくは柔軟剤なんか香水なのかな。そんなとてつもなくいい匂いがふわり空気に乗つてきて、頭がくらくらして思わずCDを落としてしまいそうになる。」

そして、そんな匂いを惜しみなく醸し出している秋乃さんの私服がワンピースだから、胸元がいつもの制服の時よりも強調されていて目やり場に困つてしまつ。勿論凝視などしていません、……いや、もうこれチラ見は仕方ないよね。

「古音君、どうしたの?」

「い、いえ、何でもないです。それよりどうしようかな。あの、この一枚は結構強めにオススメなんで、秋乃さんの好みなジャケットの方のCDを選んで下さい」

「おお、どっちも聞いたことない名前のバンドだなあ。古音君、流石だね。うーんどちらにしようかな。どっちもジャケット凄く綺麗で迷っちゃうな」

俺が差し出す一枚のCDはを見詰めて、秋乃さんは口元に指をくつつけながら悩んでいる。この人はどんな仕草をしてもなにをやっても可愛いな。いい匂いはするし、どれだけ世の男子を惑わすおつもりなのでしょうか秋乃さん。

「決められないー、もう今日買わなくて多分別の日に選ばなかつた方のCD買いに来ちゃうと思つから、私どっちも買うことにする」「おお、大人買いですな。ってか秋乃さんのそのカゴの中結構凄いことになりますねー……もう俺そのカゴの会計が恐ろしいです」

「えへへ、私貯金とか今まであんまり手付けてなかつたし、今のところまだ余裕あるんだ。けれどちゃんと節約できるといふではしてるんだよ、これでも」

秋乃さんは意外と節約家だった。なんだか想像しづらいのだけれどもしかしたらタイムバーゲンにも行つたりするのだろうか。もし、あの戦場に至高の華の如く秋乃さんがいたのなら俺は彼女の為に戦士になるだろう。そう、タイムバーゲン戦士。しつかり二人分勝ち取つてみせる。

つと脱線した妄想を取つ払つたところで、まだ見てなかつたジアンルの棚や洋楽の棚を一緒に見て回つて、オススメしたり一緒に視聴したりした。偶然とはいえるでデータの様だったの緊張しながらも幸せな気持ちで楽しく見て回ることができた。

レジにお互いの会計を済ませると、黄色いCD屋のロゴが入ったショッピング袋を手に提げ、気に掛けていた愛の姿を探す。

「あれから、愛見なかつたな。本当にビビリつたんだろう」

「えつーと、あ。いたいた」

秋乃さんは愛の姿を見つけるとひらひらと手を振つて、それに気付いた愛はとてとてと小走りで近寄ってきた。

「愛どこいってたんだよ、ちょっと氣になつてたわ」

「いやー、うん。ちょっとみたいCDとか雑貨あつたからさ、『めんごめん』

「そつかそつか。それで見つかつた?」

「んーん、結構探してみたけど見つからなかつたから、店員さんに

頼んで注文してきたよ」

「えへへ、うん。全然いいよ」

愛は愛で用事を済ませれたみたいでほつと胸をなで下ろす。相変わらず嬉しそうに背中のベースに触れたりしているのを見てなんだかこっちまでほつゝりした気持ちになった。

「このあと古音君と望月ちゃんはなにか予定あるの?」

「うーんあるっちゃありますけれど、ないっちゃないです。どうしたんですか?」

「うん、折角だからみんなでお茶したいなつて。ほら、この上に珈琲屋あるじゃない」

「おおっ、いいですねっ」

秋乃さんが提案する珈琲屋は、今いるビルの地下からエスカレーターで登つて、入り口付近にあるカフェだ。高校生が帰りにノートを広げて勉強していたり友達とゆっくりしていたり。勿論パソコンを使っているサラリーマンやOLなんかも集まる人気スポットだ。

そんな魅力的な提案に目を光らせて賛成した愛は、見るからに嬉しそうにしている。

「じゃあ決まりね。私喉乾いちゃつた、さていこつか

先導をきつて歩き出す秋乃さんな笑顔は少し蒸し暑く感じるビルの地下店内に居るのに、心なしか涼しいような、暑い夏の散歩中に気紛れに吹く涼しい風のような爽やかさに、素直に感嘆した。たまたま此処に居合わせた男の視線を一瞬で奪つていった事には、きっ

と気付いていないんだろうな。

とりあえずエレベーターをあがつて、二人に着いて行くとあとと  
いう間にお洒落なカフェに到着してしまった。実を言つと今までこ  
のカフェに興味はあつたものの、お金の問題や注文方法がよくわか  
らないという理由で一回も足を運んだ事が無かつた。

「さて、何頼もうかな。雨姫は何頼む？」

「愛、あのさ、実はさ」

「望月ちゃんはなに頼むー？私この抹茶のにしようかなつ  
実は頼んだことがなくつてよく解らないと言おうとしたら秋乃さ  
んが遮つてしまつた。なんかおかげで言い出せなくなつて結局一番  
最後に注文して、事情を話したら店員さんが懇切丁寧に説明してくれ  
た。うう、後ろにちよつとした列も出来てたし恥ずかしかつた。  
なんでもSMの表記じやないんだよ。

「いやー、まさか雨姫、頼みかた解らないとは思わなかつたよー」「  
ねー、ちょっと意外かも。あの戸惑つてる古音君可愛いかつたな  
あ」

愛は先程買つてきたベースを椅子の横に置き、自分に立て掛けて  
いる。愛が注文したのはホワイトチョコのアイス珈琲だそうだ。美  
味しそうにホワイトチョコ珈琲を一口飲むと小馬鹿にした様に微笑  
んでいた。

秋乃さんは抹茶のラテの上になにやらクリームがこんもりトッピ  
ングされている。ほのかに苦味があつて、クリームの甘さとのバラ  
ンスが絶妙なのだそうだ。専用のスプーンで抹茶に浸したクリーム  
を口に運ぶと、秋乃さんも小悪魔的な微笑みをして此方を見つめて  
いた。

「しようがないじゃん、やっぱ初めては入りづらいし注文の仕方も  
特殊だから迷うつて。秋乃さんも可愛いとかやめて下さい照れます」  
居心地が少し悪くて、間を持たせようと注文したドリップ珈琲を  
一口飲むと、少しきつめの苦味ががつんと味覚を刺激する。カララン

つと音を立てる氷が冷たさを引き立てていてとても美味しい。自分で淹れる珈琲とはやっぱり全然違った。

それから、外からの風が気持ちよく入り込む快適な店内で、珈琲片手に今日買つたCDの話や愛の買つたベースの話。それに色音のこれからについてや、どうでもいいようなくだらない話をしていると時間がゆっくりと流れていった。

気付くと外はもう夕暮れ、空は様々な赤や薄紫で彩られ焼かれていた。ゆっくりと流れる時間に身を任せていたらもう既にスーパーのタイムバーゲンは終わってしまっていたけれど、買い物は楽しかったし秋乃さんと愛とまつたり珈琲を飲めたから、多少心残りだつたけれど良しとすることにして、他愛の無い話に花を咲かせたのだった。

#### \* CD屋での一コマ

「ちょっとこいかしら、望月さん」

「うわわわ、水無月先輩だあ、どうしよう絶対なんか言われる。ここは大人しく従つたほうがよさそうだな……。」

「は、はい。水無月先輩、こんにちは。み、水無月先輩も買い物ですかっ？」

「うん、CD買いにきたんだー。っていうかどうしたのよ、そのよそよそしさは。そして一昨日まで望月ちゃん私のこと秋乃ちゃんと呼んでたじやない」

「う、相変わらず眩しくて柔らかい微笑みをくれるなあ。そして今日も超絶可愛い。そう、私は今幼馴染の雨姫と買い物中だ。そして何故あたしがこんなに動搖しているのかは、なんなく先輩が雨

姫のことを気になつてゐるよつたな気がするつて、この只の女の感つてやつだ。因みになんとなくあずあずもそんな気がする。

「あー」あたしが休日は雨姫と買い物しているところに出来くわしたらいどうだらう。いや、誤解はしないで欲しい、決してみんな不仲な訳ではない、むしろ凄く仲がいいとあたしが思つている。

「連絡くれたらよかつたのに、私も望月ちやんと古音痴とも買い物したかったなー。背中のベースはどうしたの?」

「ははは、すみません、ベース選びに雨姫に手伝つてもういちまいでした。でも決してこれ抜け駆けとかじゃないからねつ、秋乃ちやん

ん

「あははは、わかつてゐるわかつてゐる。可愛いなあ、望月ちやんは、うつづー、やつぱりすぐ大人っぽくて私服もこんなに可愛いて、一枚も一枚も上手な気がするなあ。見透かされてる、のかな。やつぱいつゆうとこ、敵わないなあ。

「じやあじやあ折角だからCD選びこ、古音痴に手伝つてもういたいんだけれど、いいかなあ?」

そんな先輩の提案に、若干の後ろめたさがあるあたしが元氣よく、そして潔くこう返すのだった。

「も、勿論ですがなーっ!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1036m/>

---

色彩コード

2011年6月19日21時40分発行